

棹

太



老田
しんせう
画

第
百
三
號

行發社棹太京東

ミカラチに腸胃

東京市日本橋區酒町二ノ十
 新潮製藥株式會社
 電話 茅場町三八一三番
 振替東京一〇一〇八番

松 幸

すき焼

和洋御料理

淺草公園 (千束二ノ三四)

牛鍋本店

電話根岸 (87) 〇三八〇番
 二〇〇〇番

風流・金ぶら・茶漬

【美地句】

去月屋

新橋二ノ八
 電銀二〇八

東都十五義會と兜會

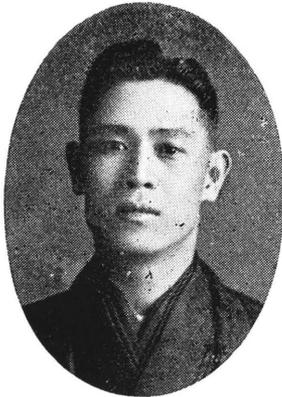
兜會々々長
鈴木和樂氏



東都十五義會々々長
細川清氏



兜會副會長
近江清華氏



東都十五義會副會長
高瀬操氏



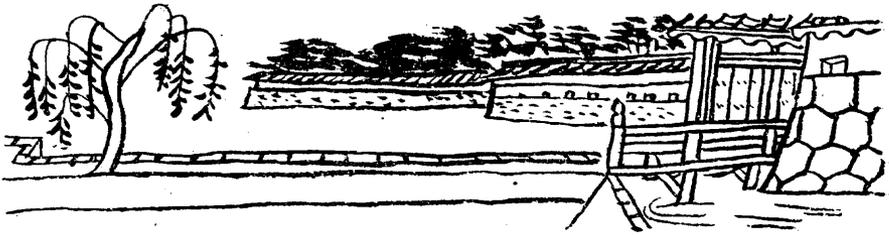
東都五十義會は第卅回より顧問、相談役、理事、幹事凡て陣容を新らたに、燦たる基礎を固められました。今回より吉田三芳氏が理事を辭任せられ、理事細川清氏が會長に、高瀬操氏が副會長に、就任されました。

兜會は會長鈴木松寶氏が満期で、今度は鈴木和樂氏が會長に就任せられ、副會長には従前通り任近江清華氏が留任されました。

て ぶ 競 に 花

『娘藤』の嬢令氏ろくと藤安





太 棹 第三百二號目次

義太夫節の今昔	是澤悟園	(二)
三月下旬の文樂	齋藤拳三	(八)
實事譚	中野三允	(二)
「壺坂」の初演年代に就て	三五郎	(二六)
名人豊澤松太郎師を偲ぶ(三)	川端柳蛙	(二八)

新作淨瑠璃

眞木薰皇國礎	草庵忍人作	(三)
	野澤勝平曲	(三)

對話	新川二八朗	(三七)
----	-------	------

大日本素義淨曲競演會成績		(三八)
--------------	--	------

太棹社彙報		(三九)
-------	--	------

太棹俳壇	芳河士選	(三六)
------	------	------

當座帳		
編輯後記	芳河士記	

表紙・カット……………宮尾しげを……………



義太夫節の今昔

素人の藝と玄人の藝

是 澤 悟 園

今から六七年前に社主から素人義太夫の批評をせよと頼まれて、毎晩貸席に聴きにいつたが、二三人聴いて歸つて來てさて筆を握つて見ると、どの人の語り口もみんな批評の價値がなくなつて、又翌晩他の貸席に聴きに往くと、何にも頭に残るものがない、其のために六七度も繰り返して聴きに往くことになつたが、この毎晩聴衆になつて聴いて廻つた努力は随分苦しかつた。それ以來素人義太夫の批評を頼まれると、その時の苦しみを思ひ出されて、つい逃げてしまふて素人の批評は一切筆を執らぬことにした。併しそれでなくても大體に於て素人の藝を聴きに往くのは好いことと思ふが、批評するためには往くことは決して好い氣持にはなれぬ。御都合主義なら兎も角、眞面目な批評の立場からは、到底出來得ぬものとしみ／＼考へさせられた。從來文樂座の批評はいつも書いて來たが、今から思ひ出して見ると随分思ひ切つて點の辛い批評をして來たものだ。某太夫などは出合ふても互に口さへ聞かぬことさへあつた。樂屋同志は昔と違ひ總じて遠慮勝ちで、表面からガチ／＼藝のことを云ふ太夫や三

味線弾きは殆ど居なくなり、自分の育ての弟子にさへ遠慮する當節、素人の評者の立場から、古格、古實、風格、型、役場などまで思ひ切つて謂はれるために、玄人側からは辛い批評と思はれて、随分憎くまれもしたものだ。併し近頃になつて考へて見ると、昔は悪口を謂ふても、謂ひがひがあつたが現今では悪口を云ふて見る太夫もなくなつた。洵に心細い次第である。昔は語る太夫の役場の風格がはつきりと残されて居つて、太夫の力量が優れて居るために、いつまでも語り口の記憶が頭にこびり付いて離れなかつた。太夫の力量で評者の耳にくつきりと印象が残されたら、忘れようとて、忘れられるものでなく、容易に拭ひ落せるものでない。それだけ太夫は必死であり、又三絃弾も懸命に弾きこなし居つた。この太夫はイヤな癖のある語り口と思ふて批評するために一層細かく聴く内に知らず／＼に釣り込まれて、深く印象を残される眞劍味のある藝格のある太夫もあつたが、之等の太夫は血と脂でたゞきあげた修業から生れた藝と、つく／＼首肯せられた。要するに、語る太夫三味線弾は積極的の立場であり、

聴く批評者は消極的の立場にある。則ち太夫の語物が批評家の脳中にはつきりと残されたら、或る意味で批評者は太夫の藝力に負けたのである。現今の文樂座の太夫三味線には批評者の負かされるような太夫は段々と乏しくなりつゝあるのを悲觀する次第である。元來自分は幼い頃から義太夫が好きで實父に連れられて文樂座、彦六座は無論のこと其當時の名人と云はれた、二見金助攝津大掾、先代大隅太夫、三絃彈清水町團平師、先代廣助などを見知り、素人義太夫の大家、故高木蟻洞氏、故人貴風、貴若の兩氏などにも實父の關係で合ふて、いろ／＼有益な話を聞いたが、其當時の玄人は所謂玄人としての持前藝「玄人藝」實に堂々たる風格が備はり、又素人は素人としての立場による所謂素人らしい「面白味のある至極垢ぬけのした藝風があつて、何處までも玄人の藝と、素人の藝とは隙かに區分が出来て居り、誰の耳にもはつきりと聴き分けがついて居つた。玄人の藝は幼時から長い間の修業のために自然と力量がついて、其の貫祿、及び藝格が超然たる處に堂々として氣魄が備はり、其語り口にも其人の個性と特長が瞭きりと湧き出て居り、素人の方は面白味もあり器用に語りこなして居つても、肝心の處に力量と聲巾が足らぬのと落付がとれて居らぬ、一言で云へば、玄人は懸命の藝であり、素人はどこまでも道樂の藝である。最も素人から玄人になつて大成した人が偶にはあるが、夫れは昔のことで、京都で生れて玄人になつた、組太夫、灘の酒造家であつた柳適太夫、

伊丹の鴻池村出身の先々代の呂篤、太夫になつて呂太夫等のの人々は義太夫が飯よりも好きで、幼少の頃から玄人同様の修業を積み、玄人になつても決して聽劣りがせぬ斗りか、今猶其の藝風が一般から慕はれて居る。今日でも小春太夫貴風太夫、明石の炭屋であつた錦太夫、之等の人もむづの素人から太夫になつたが、自身の得意にして居る二三段の語物は、相當に聽かれるのみか、或る點などは玄人も及ばぬ處もあるが、曩に述べた肝心の修業不足のために、何となしに素人臭い處があり、力量と藝格が整ふて居らぬのは瞭かな事實である。邦樂の内でも義太夫節は最も至難な稽古事で、素人として一通り語れる迄には十年や十五年の稽古と修業を怠らずせねばならぬ。ましてや玄人の修業は想像もつかぬ程の苦心と努力の上に、其人が生れつきの義太夫に當て嵌つた素養と忍耐とがなければ物にはならぬ。其天賦の個性がある上に幾十年の長期に亘つて、自然に悟つた呼吸の死活により、精神の修養から生成した真情が、自然と陶冶せられて、金玉の聲を發して微に入り細に涉り、一語一節にも愛着の氣持がこもり、或は嬉しく、或は嘆しく、必死の氣合が逆つて、語る太夫も彈く三絃も綜合的に躍動し、聽衆の全部が思はず其の古典の雰圍氣の裡にとけこむで、深い興味と、眞の慰みに心酔させられてしまふ。

素人は、素人としての分限を踏み損はぬような心掛けが肝心だ。何としても良き師匠を選んで眞面目に稽古をすることが第一義である。現今の素人は得てして稽古に辛抱が足らず

兎角に早く語りたがる習慣がある。一つは師匠の生活關係からして、ろくに語れもせぬ者を無闇矢鱈にすゝめて出演させて、褒め稱えてすぐに天狗がらして糸代をかせぐ悪癖が流行して居る。洵に師匠として無責任の仕打である。さう／＼短時日の稽古で語れるものではない。いつかは本人自身も下手さが知れると共に、稽古がイヤになり遂には歇めるか但しは天狗なれば他の稽古屋に去つてしまふ。他の師匠は物質上から打算して、待つて居ましたと歡待する、本人は好い氣持で一層天狗になる、さうなつたら最早結局で、義太夫とも何とも譯の分らぬものが出来あがる。年を経るまゝに悪達者になる斗りである。義太夫節の稽古は自分が語るよりも、聽くことが肝心で、結局は悟ることが大切である、好い種子を蒔かねば好い花が咲かず、好い實がならぬ。良い師を得ねば、良いことは語れぬ。

素人の上手とものではやされて居る中にも、義太夫節の根本をはき違へて、餘りにも達者過ぎて、聽き苦しく、嫌味たつぷり鼻持ちならぬ人が澤山ある。之等は稽古屋藝の師匠に就いた器用淨瑠璃の化物である。稽古屋藝の二三の悪癖を云へば、地合も、詞も、めちやくで、音使ひ、聲使ひの區別が付かず、引き地と、うみ地が分らず、巾も、切も、三段目の風格も、四段目の音使ひも無茶苦茶で、詞は歌舞伎の芝居がかりで、三味線も亦同様で、死活の工夫もなく、入れ撥と、死に撥と、常間で、どこも、こども、節に離れず就く斗り

半丁の間合も考へず、全るで眠むつて居るか、起きて居るか譯の分らぬ弾きかた、之で義太夫節の三味線かと呆れる斗りで、イヤ早愧かしさの程度を通り越して沙汰の限りである。露骨のところは渡世主義の稽古屋藝は、義太夫節の毀し家の本家で、素人に對しての罪惡史である。

年に一二回文樂座の東京引越興行に來る上手な太夫が過去幾十年に涉つて、血と脂の結晶で、數百回も語りこなして圓熟した藝風と、故人の名人上手の太夫が語り残した、風格ある役場の深遠な節付も分ならず、素人の癖に此の玄人の語り口を鵝呑に眞似て、出鱈目、出放題な雜駁な聲を振り立て、得意然と出語り、弾いて居る師匠も腹の中裏では、愧かしさを我慢して、笑ふことも出来ず眞面目な顔で糸代の勘定して弾いて居る心持ちを思へば、世間も廣いものかなである。

故人竹本春子太夫が、在世の頃、大阪に幼聲會と稱して素人の採點會があつた。たしか七八年も續いたと記憶するが、故人は嘗て此會の審査を依頼せられて屢々出懸けたことがあつた。氏は斯道の向上發展のため遠慮なく、嚴選して宜しきことを條件付で引き上げたので、發起者や幹部一同は、氏の承諾に仍り會の權威の出來たことを衷心から嬉び、隨喜感謝の意を表したが、さて其の審査の結果は意外の番ぐるはせて、上手とか、達者とか云はれて來た大天狗連中は無残にも全部蹴落されて、今まで名もなき連中で、年數は淺くとも良い師匠に就いて眞面目に稽古して來た人々のみが、謂ひ合したや

うに上位に昇り、非常に面目をほどこしたが、之まで自稱大家をきめ込だ連中は容易に虫がおさまらず、審査の異議を申立てたが、審査員の春子太夫氏は眞摯な態度で、従來稽古の考へ違ひを仔細に反復説明し、由來義太夫節は古典の風格を崇ぶ關係からしても、素人の力量不足のものが出来もせぬのに、玄人の惡癖のみを眞似たがる習慣ほど恐ろしきこととはなく、結果は好いところは採れずに悪い處のみを模倣することになり、其の人の持つ個性の特長はいつしかと消え去つて、惡癖のみが残つて所謂惡達者の義太夫節となり、襟を正して聽く氣持にもなれぬと評したと或る人から聞いたことがある。

本筋を知つて居る良い師匠は金で藝は賣らぬと威張つて居ても喰はずには居られず、己むなく弟子をとつて教へて見ると、さて金持であり筋のよい弟子はめつたに來ぬ。この人ならばと力を入れて稽古を付ける、覺へが悪いらいと自然に言葉も荒くなり、偶には叱言の一つも云ひたくなる、師匠が少し激しい稽古をすると、立腹して私は樂みに稽古に來て居る、別に玄人になるのではないと佛頂面、師匠の方もさうなると遠慮氣兼で、結構々々の一點張で、事勿かれ主義で取扱ふようになる。かゝる風習は單り義太夫斗りでなく、何れの稽古場にもある例ひで、昔の師匠は月謝を納めた上に、禪房の修業のやうに薪水の勞をとる氣持で、障子張りも手傳ひ、拭掃除の世話までして、師弟の間は眞の情味で繋がれて、善

きも、惡しきも親身泣き寄りて至極圓滿にあつたものだ。藝事はたゞ、語つたり、唄ふたり、弾いたりすることのみが能でなく、愛情から出た眞の藝でなくては浮ばれない、その平素の師に對しての弟子としての行動が、いつしかと藝に顯はることを恐れて、他人同志の交際までも内弟子連中は賑々しく言はれたものだ。「内弟子と稽古休みを見見かな」「うれしさに師匠が泣けば弟子も泣き」川柳として平凡の作なれど、師弟の情味は斯くもあるべき筈だ。玄人は藝を金にせねば飯にならぬ、上手になつて最負客に可愛がられ、聽衆に褒められねば金にはならぬ。愚にもつかぬ前受藝や、イヤ／＼ながら醜い藝もやらねばならぬが、素人の立場はそこへゆくと正反對で、素と／＼金を出しての道樂だと云ふ立脚點の上に、第一は自身が心ゆくまで愉しみ、然る後に他人に聽かすと云ふ動かね信念に燃えて居るから、昔の素人に、垢ぬけのした、立派な品格のある、餘韻雅情に富んだ、高木蟻洞氏の如く、堂島の十三氏の如き、素人の名人が出來得た譯だ。序に述べて置くが、蟻洞氏の日向島は故松葉屋廣助翁に十幾年懸りて稽古せられたもので、日本一の日向島と折紙をつけられた程で、團平師匠に叩き込まれて、玄人の日向島語りともゆるした。名人の先代大隅太夫が、嘗て蟻洞氏の日向島を聽き、初手の語りばかりと、景清の述懐と人物の品位に至つては、氏が持前の獨特のもので、到底玄人の語れぬ呼吸だと讚嘆したと云はれて居る。又、十三氏の彌作の鎌腹は同氏自身の手

によつて増補改刪せられ、節付も同氏が苦心の賜である。現時一般に語つて居る型は、十三氏の節付によるもので、其後名人團平氏が處々節付を變へても居るが、當時大阪の玄人は辭を低ふして素人の十三氏の宅に教へを乞ふた程である。

誰れもがこの氣持ちで、良い師を選びて稽古すれば、ある程度は眞のことが語れる譯だ。心を豊かに持して、歩みを續けてゆかねばならぬ。良い稽古は月謝が高く、金がかゝり、交際費が嵩むのは、決して名譽税でも何でもない、善いことを習ふには、金がかゝるのは當然過ぎた當然だ。

大正六年に上京した時だつたと思ふが、其頃は東京も素人義太夫の最も簇立した時で、或る溫習會へ友人に誘はれるまゝ聴きに往き、樂屋ではからず某氏より故人攝津大掾と、故人大隅太夫との優劣を自分に問はれて困つた事があつた。東京の人士に分り易く、當時人氣の高い、落語家の名人小さん圓右の兩氏に比較して、攝津翁は、小さんの藝格の持主であり、又、大隅太夫は、圓右の藝格に當る人で、兩人共に名人であり、上手であると答へた。小さんは聴衆を無理に笑はさんとする技工もなく、彼自身が話題中の人物に化して、其の一語一笑が自身で樂み、更らに藝を賣る處がなく、頗る自然であり、自由の境地に三昧する風格のあつた人である。攝津大掾も決して藝を賣らずに、至つてすなほな自然の藝で、生來の美聲である上に融通無碍の天才的の出現で、其純潔な高風が、翁の演出にはつきりと顯はれて、氣高い品位の備はつ

た名人であつた。其語物も従つて、御殿政岡忠義、二十四孝四段目切、中將姫雪責、忠臣藏九段目、加賀見山七段目、其他澤山あつたが、上品な金襖物が得意とせられて居つた。大隅太夫の藝風は、圓右式で自己を捨て、力量で聴衆をひきしめ、氣合と氣魂の迸しつた上に極めて錆び切つた寫實の語口であつた。名人團平に鍛冶屋の弟子から見込まれて、自分の稽古臺として魂限り命限り、たたき込まれた、堂々たる藝格は當時の横綱的存在であつた。しかも何を語つても感心させられ、三段目、四段目、半世話、眞世話何でも來いで就中、日向島、志度寺、合邦、伊賀八、杵掛、壺坂、紙茶、帶屋等は其の冠たるものであつた。要するに苦心研究と修業から育成された稀有の上手であつたと答へたと記憶して居る。

義太夫節も過去のものに葬られて、恰も骨董視されて、唯一の文樂座さへ今日では興行的價値も認められず、其存在さへも疑はれ、殘骸の取扱ひを甘受せねばならぬ時代となつた明治の中頃から斯の藝術に耳慣れて來て居る自分としては、遂には滅びゆくべき運命にある、尊き藝術に何物よりも愛着の涙をそゞぐ次第である。單り義太夫節ばかりでなく、繪畫界でも、歌舞伎劇でも、凡そ日本の古有傳來の藝術に屬するものは、過去の明治時代に比較して見ると、現代のものに餘りにも大衆向きであり、如何にアテ氣があり過ぎるのと、卑俗であり又違つた意味での透明を缺いて居ると感ずる處がある。眞に藝術を樂むものから謂へば、かゝる文化の現れを觀

て寒心すべきことと考へさるるのである。人心の安定を藝術方面から強要して見ても、其の藝術に安定がないときには、民衆の心にも亦安定があらぬ譯だと思ふのである。近來世間に流行してきた、西洋音楽の模倣や、卑俗極まる俗曲歌謡の類が、日本古有の精神に合流するものなるか、否か、自分等が視て極めて俗悪性のもと思ふても、現代のあらゆる藝術と稱するものが、之であるから、音楽ばかりが現代の流行に適はぬ限りは興行として獨立して往けるべき筈はあらぬ譯だ。之が則ち現代の藝術であり、民衆の心の現はれなのである。現代の民心が藝術に對する俗悪萎縮するのを視て、恥と思はぬことは國家として眞に悲むべき次第である。現代の藝術方面に眼を向けて何を視ても精神的内容の充溢したものは皆無であるから、之を批難するのは、天に向つて唾するやうなものだ、かく思ふて觀れば音楽の人形淨瑠璃や、歌舞伎劇なども、漸次に衰滅して往く運命に辿りつゝあると見做より外ないのである。現代の若い人たちに音楽の話しをして見ても、殆ど知らぬ人が多いのと、寧ろ遅れた意味で輕蔑した表情をはつきりと示さるゝ始末で、現代の青年が流行を追ふことにのみ専念して居る彼等の心の何と云ふ淺薄なことよ。彼等は俗惡極まる現代の混合模倣の流行に頭を占領せられて、邦樂の深遠なことや雅典の風格に富むで居ることさへも全く知らないのみか、別に知らうとも思ふて居らぬのである。(昭和十四年二月二十七日脱稿)

西住大尉

中野三允

立つ矢であれば針鼠千有餘個の彈丸の跡三十四回の激戦を語るかたみの此タンク昭和十三年五月

クリークの土手見え隠れ深さ測りて馳せ戻る何に躓き倒れしか壕中時計の文字板をぬける砲彈破片創

全身に浴ぶ血しぶきの西住大尉と見るよりも味方のタンク三臺がかこみてタンクに收容す手當の甲斐もなき深傷

上官部下に假乞ひ母兄弟妹へも次第に衰ふ聲かすか天皇陛下萬歳とさげびて逝ける快男子

三月下旬の文樂

齋藤拳三

何時も酷暑の時でなければ東上しない文樂が、三月下旬と云ふ觀賞の好季節に來た事は私の知る限り今度が最初である。

が私は折り悪しく脚氣が再發して遠隔の僻地から變り目ごとに通ふのは丁度、調子を痛めた古靱太夫が、あの無理な聲を工夫して務める高座なみに苦痛だつた。

其れでも毎月樂しみにして居る「可樂を聴く會」さへ犠牲にして通つたのも結局、津、古靱、駒、大隅等の私の愛好する四大夫の藝が聽けるのと、此れが最後かとも思はれる榮三の管相丞、合邦、十次郎等の東京に於ける初役を見る爲であつた。

前から私は人形よりも淨瑠璃の方により以上心を引かれてる方の文樂ファンであつた。人形淨瑠璃の理解者である安藤君や小泉君程に人形に對して怒り悲む事の少なかつたのも其の一人であつたのであらう。

東京の文樂ファンは一流の畫家あたりでさへ、幸にも人形使ひの藝を買かぶつて居る。餘命幾何もない人形芝居だ、幸にも買かぶられた其の儘で最後をかざらせてやりたい。其れ

が私の念願であつた。

然し今度私は、私の生温い態度の非常に誤りであり罪惡である事を知つた。其れは中堅をなす若い人形使ひの餘りにも不勉強で無智傲慢な事である。私は此の寂しい悲しむべき事實を公にする紙數を持たない、いづれ他日稿を改めて書かせて頂く。只、今は安藤鶴夫君に人形の愚劣な一面を暴露する事を常にいさめて居た私の不明を謝すだけにして置く。

少くとも今の文樂は三業の内、太夫と三味線が斷然人形使に優つて居る事をはつきり特筆して置く。

第一回 三月廿一日見物

盲杖櫻雪社は時間の節約上無い方がいい。

時雨の炬燵の前半は駒太夫、清二郎で非常に面白い。此の一組は毎回出し物が極ると必ず隠退した前三味線紋下鶴澤友治郎の家へ出かけて駄目を出してもらう。失明、老體の駒太夫に此の尊い精進があればこそ、あの小音で然も土佐太夫の名品の耳に新らしい今日、この一段を美事に語り生かして後半を語る織太夫、團六を美事に引繼してゐるのである。清二郎の糸も三調子ととのつた腕である。

織太夫は三五郎を甘く語つた。團六の糸は「涙ながらに」の前後などに吉兵衛の味が出て来た。おそらく稽古にいつてるのであらう。

人形は全部平凡。

大隅太夫の夕顔柵も樂々として居て結構。古靱太夫の尼ヶ崎は亦聲を痛めて居た。「人非人」などを何時もより強く云ふのも悪聲をかくす爲の苦心であらう。越路太夫は調子を痛めてる時は尙面白かつたそうだが、聲を痛めた古靱太夫は二番刷の廣重の版畫で、演る事は本格でも印刷が悪く初版の様な味が出ないのはいたし方がない。

糸の重造も友次郎宅の女義の稽古を見學に行く勉強家である。清六の代役を務めてビクともしないのは頼もしい。

人形はめずらしい榮三の十次郎が、も少し動いてもよからうと思ふ個所もあるが、樂々として居て味が深い。座頭の重責上荒物ばかり使はされてるが、これが本役なのである。

津太夫の沼津は折角の名品を毎年上京する度の雜用に繰りかへさせられて、吾々の感銘を稀薄にしてしまつたのは語り物の豊富な櫓下に對して氣の毒である。古靱太夫や土佐太夫は少しづつでも語り方に氣の變る人だから其れ程にも感じないが、津太夫は不變、單調な人だけに今度の上京には沼津や「ども又」は嚴封すべき語り物である。

人形は玉次郎が平作を使へないのは寂しいが、多爲藏崇拜の門造の使ふ平作も一興で佳品で有る。門造は善かれ悪しか

れ一つの理想を持つ古實師で有る點を多とする。多爲藏の演出法中自分の持味に無い點をよけてるものも聰明で有る。

古實通で有名な故豊澤富助の門人富太郎が太夫に轉向して義經腰越狀の三ノ切を出して伊勢太夫と改名披露をした。太夫不足、三味線過剩の斯道に喜ばしいが、此の人も少し調子を痛めて居た。他日を期したい。人形は平凡。

第二回 三月廿五日見物

壽柱立萬歳と契情儂莊子は時間短縮上無い方がいい。文樂は一日中熱心に聴くと可成つかれる。愚劣な出し物は無いに限る。特に蝶の道行に名人榮三を赤青の電氣の光線の間に見る事は痛ましい限りだ。

折角めずらしい姫山姥が出て駒太夫の口に合つた語り物で面白かつたが、人形の方は八重桐の後ジテの頭が面白いだけで、榮三の出ない若手の演出ではまるで信がけない。故雀右衛門の傑作を知つてる私にはくだらなかつた。玉藏代役玉幸の煙草屋源七が後向きに三味線を弾くなど悪寫實である。東京で初めて出た菅原の二段目は面白かつた。特に東天紅を語る大隅太夫は宿根太郎が上出来で「ビツクリした」と泣いたわく／＼の件など實に面白い。

津太夫の「相承名残り」も品位にかける難はあつても、流石本格的な修業をして来た人だけに聴ごたへがある。

人形は榮三の菅相承が傑作、絶品で有る。人形は動きの無いもの程至難、と云ふ斯道の格言が此の相承を見てはつきり

解る。

門造の兵衛が、立田に名残りを惜む宿根太郎を打つのも原始的で面白い。

文五郎の覺壽は故中車などが眼にあつては少しも面白くない。文五郎は娘の色氣を出す點が非凡なだけで、非常に買かぶられてる人形使である。其の演り方が時々變るのも有難味を稀薄にする。

次の合邦は端場を語る伊勢太夫の三味線の仙糸が面白い。仙糸は嚴格に論じたらば一種の不具者の三味線であらう。腕は文樂中弱者の方、張り切りなどは甘くひつかからない事がある。然もアシライなどは實に甘く文樂中一二の美事な味を弾く、如何にも自分が語る時は弾いてもらひたい様な三味線で、丁度其の長短が綱造と全く逆である。初日の五斗などでと其の短所が出るが、今日の端場など美事な持味を發揮して居る。

古靱太夫の切りは前日は「入る月の」までで織太夫の代役の由だつたが、今日は無理に全段を語つた。あの難聲を美事に使つて「わりやまだ死なぬか」や「止めるのじあ」など實に甘く云ふ「どれ程ほれておつても」なども面白くて成程と思へるが「悪いはずちあ」等は何としても聲がとどかない。人形は始めて榮三で合邦を見たが、他の人とは群を抜いてる。私は今まで人形の合邦は餘りに三枚目過ると思つてゐたが、此の人で始めて眞の演出に出合つたのだ「俊徳様と女夫

になりたい」等成程敬服で有る。

悪い方の代表で榮三郎の淺香姫「秘法の毒酒」を驚かすに泣くなど當人大天狗でも馬鹿々々しい。

第三回 三月廿八日見物

野崎村を若手のカケ合にしたのは仕方が無いとして、老婆を食つてしまつたのは不都合千萬で有る。美濃屋や花菱やをカツトしても出す可では有る。

駒太夫の酒屋は土佐太夫なき以上現今最上のもので有らう。此の人の音樂的要素が、あの技巧過る書置と琴唄とからむ、作意に合つて居る。人形は平凡。

日向島も津太夫の手ざわりは善くないが、一本調子に突張りのよく藝風に合つてる語り物で「娘は賣らぬ」「船戻せ」の邊はよく其の特色を流露して、美事に櫓下の貫録と重責を全うして居る。

特に重造が綱造急休の代役を二段續きに美事に演つてけたのは頼もしい。

人形は榮三の景清が群を抜いて面白い。

古靱太夫の千本櫻のすし屋は一二枚語るだけで今日は織太夫の代役になつてしまつた。人形は一同平凡の内に亦しても榮三の權太が「つらを上げる」の後で後向きに手拭で背中をふきながら底を破らない程度に汗をふく様に涙をふく。甘い仕草を見せて居る。此れなど若手の人形使が、はきちがへて後世毒を流す事では有らう。今から豫言して置く。

終りに文樂は三業中三味線が一番多士齊々で有る。太夫も津太夫の後に古靱太夫が有る。然し人形は榮三でも死ねばめちあゝである事を斷言して置く。人形を寫生に行く繪畫さんは別にして、人形芝居好きは榮三の存命中に見て置く可きで有らう。



實じつ事じ譚ものがたり

中野三九

明治十四年三月十八日初編發行で「實事譚」といふ小冊子が、私の手許に五編まである（明治十四年發行）それが主として芝居、淨瑠璃に關したもので、悉く實説と斷てはあるが、眞の實説でないことは一讀の上、常識的に判斷が出来る。併し中には實事があるかも知れない。いづれにしても、斯の如き物語があるといふ丈を紹介すれば、私の目的は達するので、それ以上は何かに利用するなり、唾棄するなり、讀者の自由に任ずる次第である。

五編以上何編まで續いたか、或は五編で終りとなつたのか、それも判らぬ。編輯人は新潟縣平民松村操とある。出版元、大賣捌所等は卷末に詳記することゝし、初編にある緒言、並に初編引用書を左に掲げる。尙本文は總振假名だが、省き句讀がないのでそれをつける。

緒言

凡そ事正史の徴すべきあれば、閭巷訛傳を誦するあるも深く憂ふるに足らずといへども、獨り近古民間の事實に至ては正史の傳ふるものなきを以て、俗傳百出、往々實を失ふもの少からず、稗史小説の如きは、故らに異事を作造し、虚誕を粧飾して兒女を悦しむるを務め、殊に戯曲に至ては、異事を作造するのみならず、往々善を誣ひて惡とし、邪を訛して正とするの類多し。世移り、年久きに及び、遂に訛傳を信じ、

實事の反て煙滅に付するものあるは、實に浩嘆に堪へざるなり。

頃日、近世の野史雜書を涉獵し、苟も事の實傳に係るものあれば抄録して、參するに異説を以てし、校訂刪正、遂に積で數冊を成す、友人來て、これを活字に付して世に公にせんことを奨む、因て名を實事譚と云ふ、敢へて大方に示さんと欲するにあらず、聊か以て兒女の蒙を破り、實事を後葉に傳へんことを要するのみ。

初編引用書

相馬日記。祐天僧正實記。同外傳。近世奇跡考。高尾考。歷代灸上鑑。笑委集。近世江都著聞集。新著聞集。八百屋お七墳墓記。天和政要。倭文の緒環。曙新聞。菊霞具佐。天和二年江戸古圖。江戸安見。假名世説。二娘考。

實事譚初編

○累の實説

下總國岡田郡羽生村の羽生山法藏寺に、累が由來を記せる懸繪ありて、傳ふるところ實に詳なり、此の寺の門を入りて右の傍に百姓與右衛門が代々の石塔有り、その中に累が法名歸眞理屋性貞信女と鑄りて、傍に承應二癸己天八月十一日と鑄りそへあり、又、與右衛門の家には、今も祐天僧正の序を記されたる過去帳等あり。

抑々、累が實説を記さんに、今は昔、下總國岡田郡羽生村の百姓に與右衛門と云ふ鰥夫ありけり（氏は堀越なりといふ）同郡の横曾根村に住める寡婦の男兒一人持ちたりしを迎へとりて妻としけるが、その兒の容貌いと醜くして世にたとへん方なき片輪者なりければ、與右衛門これを憎むこと限りなく、常に此の餓鬼のあらんには妻をも去らんと罵り怒りければ、妻はいろ／＼に思ひ煩ひて、我が身には替えがたし

とて、慶長十七年四月十九日此の童を絹川のほとりへ連れ行きて、親として子を殺すは鳥野獸にも劣りたる業なれど、是も前生よりの約束事なるべければ恕せよかしとて、終に無慘にも横堀へ投げ入れて殺したり、此の時投げ入れたる童の年は六歳にて、名を助と稱せり、かゝりければ與右衛門は能くぞ彼の餓鬼を殺しつる、是にて目障りの邪魔は拂ひたりとて其の殺せしを賞め悦びて、以前に増して睦しく暮しけるが、翌年にいたり、妻は妊娠して一人の女を生めり。

然るに、その容貌彼の殺せし助につゆ違はぬ片輪者にて、其の上生きる、間もなく重き疱瘡にかゝりければ、其の痕顔にのこりて、これを物に譬へんに、顔は乾したる柚子の皮のごとく、色は漆塗りたる如く眞黒にて、二眼とは見るべうもあらず、そのうへにあくまで姦邪たる性質なりけるが、その名を累といへり、世の人は、是は彼の助が重ねて生れ來りしものならんとて、異名をかさねと號せり。

さる片輪女なれども、助とは違ひ、與右衛門は實の子なれば憎しとも思はで養ひ育てけるが、星移り年流れて、累が年頃になりたる後、與右衛門の者は世を去りければ、かさね一人にて暮したり。

そのころ六十六部廻國の修行者が此の村にさすらへ來て、農家へ雇はれて耕作の手助けなどしたる者ありけるを、里人等が「おるいどのとて何時まで一人で居らるゝものにもなければ、幸ひアノ修行者どのを婿にしたならば好かるべし」と

て媒酌したりしに、修業者も、かねて累の家には七石ばかりの田畠を所有してあるを聞きゐたれば、累の瘠醜には辟易すれども、田畠に思ひをかけて終に婿になり、その名をも先代の名を襲ぎて與右衛門と改めたり、かくて暫らく住みたるが、累の心はいかにも姦ましく、白しといへば黒しとまげ、直しといへば曲れりと佞れ、一として與右衛門の心に逆はざることなく、且つ容貌の醜きをも顧みず嫉妬の心あくまで強くして、與右衛門が萬一他の女と立談にてもするときは怒りたけりしかば、與右衛門は今は堪へかねて家を去らんと思ひしが、彼の田畠に思ひをかけて折角入り婿となりたるものを、今更去るも残念なり、いかで此の女を殺して家を横領し良き妻を改め迎へんものをとて、窃に殺さんことをのみ思ひ廻らしたり。

比は承應二年八月十一日のことなるに、與右衛門は思ふ旨あれば、妻のかさねを引連れて絹川向ふの畠へ豆刈りに行きけるが、終日切りとりたる豆を二ツの荷につくり、黄昏過ぐるころ重き荷の方をかさねに背負せ、自身は輕き荷を背負ひて、たど／＼と我が家をさして歸りけるが、途中にてかさねは荷の重きに困り、いかに吾が夫は自から輕荷を負ひ、妾にのみかく重き荷を背負せらるゝは不人情の限りになん、と、うちかこつを、與右衛門は今暫く忍びて行くべし、絹川を渡りなば其方の荷をも残らず我が一人にて背負ひ行かんと欺しながら、摺合の渡をわたり、絹川の西の岸をのぼり、飯沼の

弘經寺の邊りを過ぎて羽生村にうつらんとせしが、此の所にいと大なる横塚のありたるを、是れぞ幸ひなるとて、四邊に人なきを見ずまして、與右衛門うしろより累を横塚目がけて眞逆さまに突落し、わざと驚きたる聲音にて、ヤ、過ちしたるや救ひて得ませんと言ひながら、豆荷を傍に打捨て、續いて飛入り、救くる體にもてなしてあくまで累を泥の中へ突入れて、アレイ／＼と叫びながら起上るを取つて押へ、眼口のきらひなく砂を握み押込めてなぶり殺しにしたりしは、無慘といふも愚なり。

此所は即ち彼の助が母の爲めに沈められし所なり。

その時、報恩寺村清右衛門と云ふものが行きかゝりて、樹蔭に隠れて窺ひけるをば、與右衛門つゆばかりも知らざりしとなん、かくて與右衛門は家に歸り、近所の人々には妻のかさねは誤つて水に溺れて死したりと披露して、死骸をば羽生村の寶藏寺に葬りて、戒名を歸眞理屋性眞信女——承應二癸己天八月十一日と鐫りたる石塔を立てたりとぞ。此の顛末を略ぼ知る者ありといへども、累が親族とては絶えてなかりければ、彼れ是れと事荒だて、云ふものもなく其のまゝ止みにけり、與右衛門は仕濟したりと悦びて、終に其の家を己がまゝに横領し、心にかなへる妻を幾人ともなく迎へたれども、何づれも子無くして世を早うしけるが、最後に迎へたる妻一人の女を生めり、これを菊と名く。

お菊の十三になりける年、寛文十一年八月中旬のころ、此

母もまた身まかりぬ。此の年十二月のころ與右衛門は後妻の甥なりし金五郎といふを婿にとりて、お菊に妻あはせ、やがては家を繼がしめんとせしに、翌年正月よりお菊不圖病ひに犯されて例ならず煩ひけるが、廿三日には口より泡を吐き、目を怒らし、父與右衛門を屹度睨まへていふやうは、われは三十年前に絹川のほとりにて和主おぬしに殺されしかさねなり、最後の有りさまは法恩寺村の清右衛門も能く知れり、その怨みを報はんため來れるなり思ひ知れよとて、さまざまに口放り罵りければ、與右衛門は驚き怖れて生きたる心地なく、怨せくくと云ふより外に術も無ければ、金五郎も是は恐ろしき事どもなりとて實家へ逃歸りて再び頭をさへ出さずなりければ組合の百姓どもはこれを聞きて、是は捨置くべきにあらずとて、急ぎて村長にかくを告げければ、名主の三郎左衛門、年寄の庄右衛門等が相談して、醫師陰陽師などを招きて種々に心を盡せども、その甲斐なく、お菊の病ひはますます烈しくなるのみなれば、終にはいかゞはせんとて倦み果てたるばかりなり。

こゝに、其の頃祐天僧正はまだ年二十六にて同郡の弘經寺に遊學してゐられしが、此の由を漏れ聞きて、そは不愆のことどもなり救ひ得てとらせんとて、同侶二三人を具して與右衛門の家にいたり、經を誦み十念を授けなどしつゝ教化さるれども、物の怪さらに立ち離るゝさまなければ、そのとき祐天僧正は家の外に立ち出て空を仰ぎて聲高らかに呼ばるやう

十劫正覺の阿彌陀佛、天眼をもてこれを見、天耳をもてこれを聞け、それ五劫思惟して超世の願を發して曰く、極惡重惡人、無地方便、唯稱名字、必生我界と、今すでに應なくして誓願空し、靈山の世尊もまた聞け、六八の願を示し、自ら勸證して曰く、我見是利と、今既に驗なし、是れ何の利を見ん、恒砂の諸佛、舌相證明すとも誠とするに足らず、若し我が言ふこと謬りあらば金剛神をして我が首を打碎かしめよ、もしそれ稱名竟に功驗なからんには我れ今より戒を破り、俗に還り、外道を學びて佛法を滅ばさんとぞ罵られける。

さて、再び本のお菊が臥したる枕邊にて念佛數十遍せられけるに、冤鬼もつひけ忽ち去りて、お菊が病ひはじめ癒えぬ。僧正やがてかさねが法名の字をうるはしく改めて贈り、また阿彌陀佛の名號のかたはら 理屋照貞禪定尼寛文二十二年三月十日と書きてお菊に與へられぬ、是れ後の世までも與右衛門が家に奉持する懸字なり、かくてお菊が病ひ本復しけるに、同年の四月十九日の朝より又忽ち狂ひ出して、胸痛やくとて悩むこと甚し、村人また前きの物の怪のつきて悩ますにこそと驚き合ひて祐天僧正の許へ告げければ、僧正再びお菊の家に赴きて枕上まくらづかに近よりて問はるゝやう、かさねが死靈はずでに得脱して天上に生れぬ、しかるに今かく菊をなやますは何ものぞと詰られければ、息の下にて助にて候と答へけり、僧正里人を呼びてさる者ありきやと問はるるに、一老翁有りて答へていふやう、昔しかんぐのことは母が絹川に沈めて殺

『壺坂』の初演年代に就いて

三 五 郎

三月十一日の夜人形淨瑠璃鑑賞の夕と題し、文樂の舞臺からは「壺坂」が中繼され、樂屋からは藝談一問一答の形式で三業の各巨頭連の談話が放送されたが、聽いて居るうちに一つ腑に落ち兼ねたのは、その劈頭の木谷蓬吟氏の解説中に「壺坂」の初演を明治十六年十月大江橋席と説明してゐたことである。

故石割松太郎氏はその著「人形芝居雑話」の「名人團平と壺坂」の中で「壺坂」の初演を明治十六年卯十月大江橋席としてゐるが、十六年は卯ではない、これは何にか誤植であらうと思つて居たところが、後に出た同氏の「近世演劇雑考」の「團平の研究」では初演を「十六年末の十月」と何時の間にか勝手に卯を未に變へてゐるのを發見して私は苦笑した。平生他人の述作の中に誤りあらばどしどし指摘して憚らなかつた同氏だけに、流石に氣をつけて干支を合せてゐるのではあるが、これで同氏がやはり十六年だと思ひ込んでゐることが判つたのである。併し私の所藏する初演の番附には明らかに「明治十二年卯十月」となつてゐるのであるから、この儘放つて置くと、何しろ故石割氏のやうな淨瑠璃研究の大家の

發表によることであり、明治十六年が定説となる懸念ありと考へ、その際初演番附は明治十二年卯十月となつてゐることを御注意申上げてその再検査を御願したのであつた。爾後其儘となつてゐたが、漸く昭和十一年一月の「演劇學」誌上で同氏はケロリとしてその誤植(?)を訂正し、初演は十二年卯の十月と明示して居るのを見たのであるが、兎も角これが一應初演年代がハッキリしたことゝ考へてゐたのである。

ところが過日の放送で淨曲研究家として令名ある木谷氏は初演を「明治十六年十月」と説明し、而も御丁寧に「私の調べたところに依りますと——」とハッキリ御自身の調査の結果であることを附言してゐるのである。私は自分の耳を疑つた。木谷氏ともある大家がまさか「演劇學」誌上の故石割氏の訂正を御存知ないことはあるまいし、それで猶ほ且敢えて十六年説を放送發表されたところを見ると別に確かな資料があるに違ひないと思はれるのである。で一體木谷氏は何によつて「調べられたか」といふ點を私は後學のためにお聴したいと思ふ。勿論初演番附は爲念御調べになつたことであらうから、そうすると番附が案外二通りあるかも知れない、と想

像される。こうなると結局は地下の當の團平に尋ねるより外方法がないのであるが、彌陀六の言草ぢやないが、冥土へ問合せはやらねずほんの是れが論證無駄突である。

こんなことだから淨瑠璃の正しい製作年代など後世になると段々判らなくなつて了ひ、その道の學者がつまらぬ苦勞をせねばならぬこととなるのである。近々六十年前の「壺坂」でさへ、既に兩大家に依つて異つた初演年代が發表されてゐる位だから、尤も「三つ違ひの兄さん」の初演年代が「四つ違ひ」であらうとも「大した違ひ」ではないといふならばそれまでの話である。

心中傾城に係る院本

傾城八花形	傾城思升屋	傾城掛物揃
傾城吉岡染	傾城阿波鳴門	傾城酒呑童子
傾城枕軍談	傾城富白嶽	傾城戀飛脚
傾城躑躅岡	傾城二河白道	傾城吉原雀
傾城國姓爺	傾城扇富士	傾城反魂香
傾城無間鐘	傾城阿古屋松	傾城懷子
名筆傾城鑑	日本傾城始	遊君衣紋鑑
心中二腹帶	心中戀中道	心中天綱島
心中萬年草	心中宵庚辛	心中重井筒
心中二枚繪双紙	心中紙屋治兵衛	心中氷朔日
千日寺心中	會根崎心中	掛鯛心中

七十歳部隊

(東京朝日新聞より)

「一旦殿御の澤市さん、たとひ火の中水の底、未來までも夫婦ぢやと、思ふばかりか、これ、モオーシー……」

壇上七十四歳の莊喜助氏がノドはおろかカカトの邊から聲をふり絞つて見臺のしかゝり、必死に喚くは「三十三ヶ所觀音靈驗記、壺坂の段」——相勤めまず太棹は當年八十歳萬延元年生れの高田とらさん。

物凄「老齡大夫」だがもうさつきから語りつづけること四十分、おさが澤市をかき口説くあたりともなればお二人とも年を忘れて、吾が、おさとか、おさが吾か、見臺を澤市がはりにゆすぶり飛ばし、つきとばし、たうとう本が落ちたといふ無我の境。

人生七十古來稀なり——そんなのは支那の話ぢや！と果然素人義太夫界に老人部隊が「蹶起」して「壽會」といふのをこしらへた。資格は七十歳以上——八十歳の高田とらさん七十七歳の中道伊衾さん、七十四歳の山田信平さん、同い年の莊喜助さん、若い方では七十一歳の中澤巴さん、同じく井上甚作さん——

いづれも樂隱居の身の上だが「座食隱居」は日本の恥、義太夫こそは老人の「若返りスポーツ」とあつて十四日午後四時から丸之内電氣俱樂部で第一回公演を行ひ、總年齡四百四十七歳、平均七十五歳といふ珍無類の「老人部隊」の意氣を見よ——と大したハリキリ

名人 豊澤松太郎師を偲ぶ

(三)

川 端 柳 蛙

明治七年の春、松太郎師が十七歳の時の事である。道頓堀竹田の芝居（今の辨天座）へ出勤中の事『桂川連理柵』が出て、帯屋は先代竹本津太夫師、道行の主役が三代目竹本茂太夫師三味線のシテが豊澤仙糸師（後六代目豊澤廣助）人形は當時おやま遣ひの名人おやまの辰造と稱せられた吉田辰造師であつた。

この道行が大好評で連日大入を續けた。師は毎日この舞臺を見聞して大層感動し、自分も早くあんな名人の人形で立三味線を勤めるやうになりたいと、閑のある毎にこの道行を練習してゐた。

或る日の事、師が芝居へ出勤すると、

仙糸師が急病で休演されて道行の代役が師へ廻つて來た。師は非常に悦んでこの代役を引受けた。日頃練習もしてあり、コンデツションも充分とばかり舞臺へ上り、得意になつて腕を振り、思ふ存分弾きまくり意氣揚々と樂屋へ引上げて來た。

すると、彼の名人おやまの辰造師が、満面怒氣を含み烈火の如き勢ひで師の部屋へ飛び込んで來て、

『今の三味線を弾きをつたのは何奴じやい。あんな彈方で人形が遣えると思ふか』

と今にも掴みかゝらん勢ひで怒鳴られ

な。師はその劍幕に驚いて裏木戸から這々の體で逃げ出した。併しいくら考へてもその意を解せなかつた。自分ながら痛快を感じる程よく弾けたのに、何處が悪るかつたのだらうか？と不審でならなかつた。

その後修業も積み研究を重ねて來て始めて辰造師の意を解する事が出來た。成程あの弾き方では人形は遣えなかつたらう。身心を人形に打込んで舞臺を勤めてゐた辰造さんだから腹の立つたのも尤だア、濟まない事である。早速謝まらねばならぬと思つた時は、その名人は此世の人ではなかつた。ア、申譯がないと思ふと、居ても立つてもゐられず、直様墓前所へ詣ふで、衷心から詫びたと云ふ事である。

これらの話しは師の日頃の性格がその儘現はれてゐて、聞いてゐる中に思はず頭が下る思ひがした。

師の逸話は新左衛門師猿之助師等に聞いたなら相當面白い話もあると思ふが、それは後日の機會に譲る事にして次に師

の出演年表を記す事に「る。これは芳太郎師の保存してゐられる番附、番組等を基礎として調べたものだけを記すのであつて、出演の全部ではない事を御諒承願ひたい。また後日の機會に掲げる事にしたい。

豊澤松太郎師出演年表

東京に來る松太郎十六歳七年の春歸阪四月より竹田芝居出勤」

七年四月 道頓堀竹田芝居 假名手本忠臣藏 山崎街道の段切

竹本文字太夫 櫓下太夫竹本山四郎、人形

吉田金四、扇ヶ谷の段竹本長尾太夫、與茂

七住家の段竹本棍太夫、勘平住家の段中豊

竹若太夫、切同竹本濱太夫、山科の段豊竹

巴太夫(四代目)

七年月不詳 同 祇園女御九重錦大根畑の段

竹本文字太夫

七年十月 堀江市の側芝居 出世太平記中國

水賣の段切、附物、碁太平記白石嘶田植

の段

竹本文字太夫 櫓下太夫竹本山四郎、小栗

栖村の段豊竹呂太夫、嘉平治住家の段口竹

本春子太夫後の大隅太夫、同切竹本長尾太

夫逆井村の段竹本濱太夫、淺草の段竹本山

四郎、新吉原の段切竹本織太夫

七年月不詳 同 増補菅原傳授配所の段

竹本文字太夫 此時書下しより二度目の上

演也

八年四月 道頓堀竹田芝居 八陣守護城此村

屋敷の段切

竹本文字太夫 櫓下太夫竹本山四郎、毒酒

慶應三年春 天滿芝居 傾城反魂香吃又平名

筆の段

初舞臺松太郎此時十一歳、竹本長尾太夫豊

澤龍助(後六代目廣助)の連引をなす

明治元年十一月 御靈社内芝居 菅原傳授手

習鑑加茂堤の段

太夫不詳

二年正月二日ヨリ 同 妹背山婦女庭訓芝六

内の口掛乞の段

太夫不詳 此時の櫓下太夫竹本綱太夫名代

高橋竹造

二年三月 同 假名手本忠臣藏進物の段

太夫不詳 櫓下同

二年八月 同 木下蔭狭間合戦鮎波の段

竹本尾木太夫 櫓下名代高橋竹造太夫竹本

越太夫此時の切狂言は三勝半七酒屋の段豊

竹靱太夫鶴澤鹿造琴ッレ松太郎(十三歳)

二年十一月 道頓堀竹田芝居 本朝廿四孝桔

梗ヶ原の段、花雲佐倉曙將門山の段

太夫不詳 櫓下太夫竹本越太夫、座本豊松

猪之助

三年五月 座摩社内芝居 繪本太功記妙心寺

の段口

太夫不詳 三年七月 同 大江山酒呑童子是則館の段

竹本眞木太夫 頼光館の段竹本勢見太夫野

澤勝市琴ッレ松太郎(十四歳)

三年十一月 同 箱根靈驗覺仇討瀧の段口

太夫不詳 同切竹本津嶋太夫櫓下太夫竹本

賀太津夫

四年正月 同 妹背山婦女庭訓掛乞の段

太夫不詳

五年七月竹本田組太夫豊澤松太郎一座にて

の段竹本濱太夫、正清本城の段豊竹巴太夫
八年五月 同 伽羅先代萩間清寺の段切、竹
の間の段中

竹本文字太夫 切御殿の段竹本織太夫
八年十一月 堀江市の側芝居 日蓮聖人御法
海龍の口の段、池上本門寺の段

竹本文字太夫 櫓下太夫竹本山四郎、勳作
住家の段豊竹古靱太夫（初代）身延山の段
竹本織太夫

九年四月 大江橋芝居 菅原傳授手習鑑天拜
山の段、附物、敵討襷褌錦大晏寺堤の段
初代豊竹呂太夫 道明寺の段豊竹巴太夫、
佐田村の段竹本濱太夫、寺子屋の段竹本織
太夫

九年五月 兵庫村の芝居 關取二代鑑秋津島
腹切の段、源平布引瀧四段目、敵討襷褌
錦大晏寺堤の段

豊竹呂太夫 此時の一座竹本春子太夫（後
大隅太夫）豊澤九一（後二代目團平）竹本
文字太夫豊竹巴太夫（四代目）鶴澤友次郎
（先代）竹本山四郎豊澤兵吉。豊竹呂太夫豊
澤松太郎。竹本織太夫豊澤新左衛門（初代）
竹本春太夫豊澤團平（初代）

十年二月 御靈社内芝居 祇園祭禮信仰記天
下茶屋の段切、此興行大當り三十日間大

入續く
豊竹呂太夫 松太郎此時二十一歳の若年に
て三段目の大役を勤められし功により中老
に昇進せらる（現今中老古老は年限なれど
此時代は大役を勤めし勳功により昇進せし
ものなり）爪先鼠の段（初代）豊竹古靱太夫
鶴澤徳太郎

十年三月 同 双蝶々曲輪日記八幡引窓の段
豊竹呂太夫

十年九月 大江橋芝居 木下蔭狭間合戦來作
住家の段

豊竹呂太夫 櫓下竹本山四郎、壬生村の段
竹本濱太夫、竹中碧の段竹本重太夫鶴澤寛
治

十年十月 御靈社内芝居 五天笠須達長者住
家の段切

豊竹呂太夫 櫓下同、堤婆御殿の段豊竹古
靱太夫
（十一年五月九州へ行き十二月歸る、一座は
竹本大和太夫、竹本朝太夫、豊澤仙次郎。竹
本頼太夫、豊澤松太郎、竹本勢見太夫、豊澤
仙糸（六代目廣助）竹本重太夫、鶴澤寛治
十三年四月 御靈土田の芝居、今の文樂座

義經千本櫻庵室の段、吉野山道行
豊竹呂太夫 櫓下太夫竹本久太夫、渡海屋

の段竹本久太夫、すし屋の段竹本綾瀬太夫
道行花の玉垣シテ豊竹橋太夫ワキ竹本朝太
夫ツレ竹本綾賀太夫ツレ豊竹栴太夫三味線
豊澤松太郎ツレ豊澤新三郎、豊澤仙次郎、
豊澤新七（後團八となる）豊澤新之助（後
新新兵衛）野澤兵三（六代目吉兵衛）早見
藤太吉田才治、忠信吉田辰五郎、靜御前吉
田七平

十年六月 道頓堀旭座 武士鑑忠臣實記彌作
鎌腹の段

豊竹呂太夫 櫓下太夫本大常、名代竹本濱
太夫喜内住家の段切竹本濱太夫
十四年三月 大江橋芝居 妹背山婦女庭訓籬
七上使の段切、三段目掛合背山

豊竹呂太夫 芝六住家の段豊竹嶋太夫、姫
尻りの段竹本朝太夫、御殿の段竹本綾瀬太
夫、背山大判事豊竹呂太夫、久我之助豊竹
假名太夫三味線豊澤松太郎、妹山定高竹本
綾瀬太夫、雛鳥竹本多門太夫三味線鶴澤豊
造（先々代）

十七年九月十二日ヨリ 稻荷彦六座 附物、
義仲勤功記地藏經の段切
高麗橋豊竹駒太夫 櫓下太夫竹本住太夫、
三味線豊澤團平、人形吉田才治、此時松太
郎彦六座始めての出勳

▼前號正誤 一四頁上段七行目昭和五年と
あるは明治五年の誤植。



新作淨瑠璃 新義座上演

眞木ま 薫かほ 皇國みくに の 礎いしづえ

草庵 忍人 作
野澤 勝平 曲

この新作淨瑠璃は皆様も御承知の通り、大楠公崇拜者として大楠公以来の勤王家と言はれた眞木和泉守を主役として、維新の深刻な場面的一端を、忍人先生に書き下して戴き、未熟乍ら一座が去る二月十八、十九兩日神港有志の絶大なる御後援の下に神戸花隈町神港俱樂部で初演をさせて戴いたものであります。國を擧げての非常時、出征第一線の方々も銃後の國民も各その立場より御奉公に徹し居られる時、私等も、やれてもやれなくともやらねばならぬ覺悟を決して出演致しました次第で、来る五月上京の際には是非上演させて戴き皆様の御批判を仰ぎ度く存じます。

國家的偉大なる人物の活躍を、私等の藝で、どこまで表現致し得るかと考えます時、たゞ責任の重い心のみこみあげて参ります。何卒私共懸命の微意を御くみとり下さいまして、此上共御鞭撻の程偏に御願ひ申上ます。

大阪文樂 新 義 座

水田寓居の段

すめる世も濁れる世にも湊川絶えぬ流れの水や波まよし、

さるほどに眞木和泉守平保臣、心は遙か九重の、雲井の空に走れども、身に降りかゝる濡衣を晴らすよすがもなかく、に水田の渡り十餘年、忍び憤みかこちける、今日しも五月二十五日、大楠公の命日に、志ばかりの手むけごと、銘千年と名づけたる、秘藏の四絃とりあげて、さはさりの曲奏しける。折しも表に卑しからざる一人の武士「頼もう」と訪えば奥よりやさしき女の聲「どうれー」と立ち出で、琴 私ことは當家大鳥居敬太の妻琴路に御ざります、と淑やかに迎ふれば、武士は慇懃に一禮なし、國 某は筑前の處士、平野次郎國臣と申す者、眞木先生の警咳に接したく、罷り出で、ござる、何卒お取次下され。と禮儀正しく來意を告ぐれば、琴路は聽いて氣の毒顔。琴 義兄和泉守は、此程より、謹慎中に御ざりますれば、何方様にも御面會を避けて居ります、折角の御入來なれど惡からず御承引下さりませ。國 それは是非なきこと、されどまことに心残り、矢立とり出しさら〜と一首を認め、國 御内儀まことに恐れ入るが卒爾ながらこれ

を先生におとりつぎ下さるまいか、**琴** かしこまりました暫くお待ち下さりませ、と琴路は立つて離れに入り、和泉守に手をつかえ、**琴** 只今筑前の處士、平野次郎様と申される方あに義兄上に御意得たいとお越しなされましたれど、かねての御申付けにより、御斷り申上げましたところ、これをとりつぎくれよとのことに御ざりまする、とさし出だせば、和泉守はうちながめ、**和** 何、四つの緒の琴のしらべのねにめで、こえまほしくかねてしのびつ、和泉守は心にうなづき、**和** 平野氏はかねてより聞及ぶ勤王の志士、粗忽なきようお通し申され、**琴** かしこまりました、と琴路は表へ引返し、**琴** 何卒お通り下されませ。**國** そりや先生にはお會ひ下されませるか辱ない、然らば御免。とうち連れて小庭づたいに山柵さくまの香り床しく清楚なる和泉の居室に通りける。國臣は威儀を正し、**國** 豫て先生の御高名を拜聞致し、御高説を承りたく突然罷り出でしところ、早速の御引見辱のふ存じ申す。和泉守も禮を厚ふし、**和** 御詞にて痛み入る、何分幽囚の身にて何事も心に任せず、只管謹慎能なる、さて今日は大楠公の御命日なれば、心ばかりの祭事を營み居りしに、貴殿の如き勤王の士を御迎え申すは、これも偏に楠公の御引合せかと、保臣恐悦に存じ申すと言葉に禮をつくせども、平野の眞意如何ぞと、眼を据えて觀つむれば、國臣もジツト凝視し、こは聞きしに勝る大丈夫、共に國事に殉するは、かゝる偉傑ぞ頼母しき、如何にもして起たせんと、死を決て詰め寄れば、和泉守

はそれと察し、息を凝しておしかへす、龍虎相打つ氣魄の闘ひ、互の意氣や通じけん燃る腫は次第に潤るみ、何時か接する膝と膝、互に手と手を握しめ、**國** 和泉守殿。**和** 平野氏互に心うち溶けて照す至誠ぞ薫りける。**和** 平野氏御來意は推察致した、拙者元より天朝に捧げし命、粉骨碎身以て國難に殉するは覺悟の上なれど、要は其方法で御さる、御名案あられるか。と言はれて國臣聲をひそめ、**國** 某はこれより薩摩に參り、藩主を説いて奮起致させたく存じ申すが、この儀如何で御ざりましような。と謀れば、**和** 薩摩は近頃外藩の武士の入國を厳しく禁じ居ると承るが何か好き手段にても御さるか。**國** されば薩藩には西郷吉之助始め他に數多知人も御ざれば如何様とも相成ることゝ存じ申す。和泉守はしばし思案の體なりしが心を決し、**和** 平野氏、拙者もお伴致さう。**國** そりや先生にも御同道下さりまするか。**和** されば平野氏拙者身に犯せし罪はなれど藩命なればもだしがたく、今日迄謹慎罷りありしが、國難は日と共に深く、最早座視するに忍び申さぬ、時機を見て脱藩せんと覺悟致し、先頃愚弟敬太親子に建白書を持たせ、都へ發足致させ申した、幸貴殿の御來駕を機とし、この處を立ち退き申す。**國** 承知する、之より一旦、肥後松村大成の宅へ參り後事は其處にて御相談致さう。**和** 何分よしなに御願ひ申す。と言ひつゝ書狀認めて手を打ならせば、嫁の琴路は手をつかえ、**琴** 御用で御ざりまするか。**和** フム吾はこれより平野氏と暫く他行致す、こ

れに委細は認めれば、倅菊四郎にこれを渡し、後より参れ
と傳えてくりやれ。琴 確に御渡し致しまする、それはマア
急の御發足、この頃捕吏の者も目をつけて居りますようす、
晝日中その御服装では。和 イヤ、夜は却つて面倒服装も
この方が目立たぬ、まさかの時は覺悟がある案じることはな
い、それより琴路どのあとのことを頼み申すぞ。琴 かしこ
まりました。和 やがて世の春に匂はん梅の花片山里の九重
なれども、と口ずさみつゝにつこりと、和 平野氏御待せ申
した。國 では御案内仕る。と泰然として表に立ち出で、肥
後路をさして急ぎけり。あとに琴路はとりかたづけ、箒持つ
手も右左夫を案じ子を思ひ、今又義兄の門出でに首尾や如何
と女氣の、降るみ降らずみ梅雨空は、琴 エ、うつとしいこ
とではあるわいな。

長州奥書院の段

天に一日明なれど時に暗雲光をとざす、國家順逆を誤れば
政治亂れて威令行はれず、民その向ふところに迷ひ外に他國
の輕侮を招く、されば防長二州の城主慶親公前代未聞の國難
に、侍臣を遠ざけ、家老六戸備前とたゞ二人、心を碎くその
折から、若侍罷り出で、若 只今眞木和泉守殿御召によつて
參上次ぎへ控へて居ります。慶 ア、左様か直に之へと申
せ。若 かしこまりました、と立て入る。案内に連て和泉守
禮儀正しく入來り、下手に座して一禮なし、和 御召により保

臣罷り出まして御ざります。慶 大儀である。ヅ、ト進ま
れよ。和 ハ、一失禮仕ります。と進み出で、三人鼎の座
につけば、慶親公は徐に、慶 和泉守今日其方に登城を求め
しは余の儀ではない、此度の國難に對し其方の所存が聽きた
いのぢや、尤も大略は書面にて察し居るが、今日は餘人も遠
ざけあれば、隔意なく意見を述べてくれい。慶 コリヤ備前
先づ其方の考を述べて見よ。備 さればに御ざります、我
が日の本は神武以來嘗て外夷に犯されしことなき國柄なるに
幕府は綸旨を待たづして外國と開港條約をなし、朝廷より譴
責あるも言を左右にして攘夷の實を致さず、此まゝに打過ぎ
なば國家の前途寒心に耐えませぬ、さりとて幕府は最早頼み
になり申さねば、此上は勤王の士を奮起せしめ、直接攘夷の
實を擧げるの一途あるのみかと愚察仕ります。と決意を示
せば、慶 フムして和泉守其方の所存は如何じや。和 ハア
憚りながら備前殿の御説一應御尤の様に御ごりますれど、攘
夷は外にあらすして國內にあるかと存じます。と言へば備
前は意外の面持ち、備 何と仰せらるゝ。和 されば備前殿
抑我が御國體は、一系一心、即ち一君萬民、君民一體にして
之天の法則で御ざる、外に輕侮を招くは、内亂れたるに因る
保臣つらく、按ずるに、今日の國難は、其因遠く、七百年の
昔に發す、畏くも我が國の政治は上御一人の權せ給ふ物にし
て、宰相、諸卿、侯伯は、補弼の任に過ぎ申さぬ、然るに中
古臣家の權力争鬪に、武力を用ひしたため、武家は思ひ上つて

政治をも私致し遂に皇道を覆ひ、霸道を辿ること久しく、その間楠公の如き勤王の士出でまして、その然ざることを示されしも、時機到らずして止み、暗雲また天を扉す、これ天理に背く道理、如何でか天責なからんや、されば、我等は天に代つて、先づ討幕の實をあげ、兵馬の大權を天皇に奉歸せしめ、政を古に復歸致させねばなり申さぬ、これぞ我が國本來の面目、よつて攘夷は外にあらずして、内にありと申せし所以で御さる。と朗々と説き來れば、備前尙も言葉を進め、
備 御高説一々感銘仕る、然るに討幕は言ふべくして中々容易のことに御さらぬ、幕府漸く衰えたりといへども、水戸家は別として紀州、尾州侯を始め、普代の諸藩も數多あれば武力を以つて對するには、勢ひ薩長土の如き優藩を起しめねばならぬかと存する、其これに依つて事成就せし曉、第二の幕府出現致さざるや、此儀聊か懸念に存する。と詰れば、和 成程殿上人は官位高くして力之に及ばず、また勤王の士は諸國に奮起致すと雖も、多は悲憤慷慨のみあつて智略乏しく、且つ兵站の資件はず、御説の通り優藩の力に依る可も、我等は天意を體しての蹶起なれば、現在の幕府とは其動機に於て天地の相違、決して御懸念無用に存する。備 然らば目的達成の時、彼等も等しく天子の赤子、將軍以下諸侯幕吏は、如何處置なされる御所存なるや。和 されば、彼等歸順の實な示さば、その罪を悪んでその人を悪まず、國民本然の姿に立ち歸らしめ、將軍以下能あるものは、それ相應に重用致して何

の憚るところ御ざろふや。備 成程國內はそれにて條理相立ち申さんが、今ふりかゝる外難は如何打開なされる御所存か
和 これは末の問題なれど、序なれば申あげん、内に一系一心を確立し、護るに國力の充實こそ必要で御さる、承るところによれば、外夷は兵は訓練に於て、また武器機械等ははるかに、彼、我に勝ると聞か、されば勉めて彼に接近し、その長を採り短を補ひ、進んで交易を開き、徳を樹て、以つて彼等を依らしめねばなり申さぬ、無意味の鎖國は國威を宣揚する所以で御ざらぬ。備 然らば幕府の採りし開國手段を責めるは如何なる理由に因られるか。和 第一は違勅の罪、第二に外夷を恐れ、その要求に應ぜしは耐えがたき國辱で御さる國事の一切を至上に奉り、君民一體となり、而て後、我進んで彼を迎ふれば、決して外に輕侮を招くことなく、また恥辱にはなり申さぬ。備 御説の通り開國致さば、數多の外人入り込み我國の美風を汚さんも計りがたく、この儀何となされるや。和 それは心すべきことなれど、世に比類なき、萬世一系を奉ぎ、億兆心を一にして、これを護れば、古佛教の到來によつて世の無常を知り、刹伐の氣分を鎮め、また儒教の入り來れば忠孝の道理を確立し、その他藝術建築、器具、調理等、有ゆる文化を消化し盡し、これを國家の血となし肉とこそなせ、之によつて我が御國體の心髓は微動だも致さざるは、歴史の上に明かなれば、何とて恐れることとの御ざろふや、進んでこれを取り入れ、以つて國威を宣揚

し、世界萬民をして、皇化に浴せしめること、これ畏くも太祖このかた、一貫せる大御心と拜察奉る、これぞ大和民族の使命で御ざる、また人生の快事では御さらぬか。と全身燃て和泉守、一言一句火を吐くばかり、宍戸備前は兩手をつき、備

實にもつて恐れ入つたる御見識、備前慚愧に耐え申さぬと禮を盡せば、和泉守も嬉し氣に、和 御挨拶に痛み入る、

先づ御手をあげさせられ、御納得あつて御同慶に存じ申すとへりくだる、慶親公は始終の様子見てありしが、慶 アイヤ和泉守其方先頃南へ行きしと承つたが、薩摩の眞相は如何であつたの。和 ハ、薩藩は公武合體論と見受けましたれば、私の考へとは、根本に於て相違致しまする、たゞ西郷吉之助に面談致すことの出来ざりしは、今以て残念に存じ居ります、また土州は未だ藩論纏り居らざるやに聞き及び居ります。慶 フームシテ其方以後の方法は如何致す所存じ

や。と問はれてハツト和泉守、こゝぞ成否の分れるところ心を鎮め威儀を改め、和 この國難を双肩に負ひ、皇國のために起たれるは御當藩を置いて他に御ざりませぬと存じます、天地神明も御照覽あれ、保臣身命を捧げ、此儀御願申上げ奉る、と聲涙共に降る悲壯の直言、返答如何にと凝視る眼光親み易く浸し難く心から對人^{あひて}を畏服せしめる稀代の偉傑、慶親公も眼を潤ませ、慶 和泉守理解つた、防長二州は皇國の捨石じや、是より直に義軍を都へ上す、總監は和泉守國家のため其方の命は貰つたぞ。和 ハ、保臣が身の面目、有難く

御請け仕ります。慶 ヲ、過分じや、コリヤ備前兵站の資、其他手落なきよう取り計らえ。備 ハ、一。三人は胸の雲晴れて交す心ぞ嬉しけれ。

天王山の段

こゝに眞木和泉守保臣は、義軍を率い都へ上り、君側の奸を除かんと禁門へさしかゝる、時戦利あらずして、天王山の陣營に退き返す。向ふを見れば淀八幡麓は山崎高槻まで、數萬の軍勢取り圍む、今を最後と和泉守、後につゞいて松山深藏其他決死の十六勇士、和泉守は徐ろに、和 義軍は遂に敗れ三將は己に此地を遁る、今僅少の殘兵を以て徒らに要害を憑むも、これ石を抱いて淵に臨むの愚でござる、拙者は此度の巨魁として防長二州の藩士をはじめ諸國の志士を率ゐ、血を以つて禁門を濫せしのみならず、五卿及び長門宰相御父子には、更に罪を累ねし道理、その責は吾一ツ身にあり、故に此地を最後とし九泉の下より謝罪致す諸士は飽まで、尊王攘夷を貫徹し、一ツ敗以つて屯挫してはならぬ、彌々發奮精進して皇國のために盡して貰ひたい、躊躇するところでない、速かに此處をお引き揚げ下されい。と懇々と訓せば、松山深藏進み出で、松 總監の御教訓は御尤もなれど、吾等は他藩の者なれば、今總監を亡ひて長門へ下るも詮なきこと、この場を最後に御供致す。と動く氣色も見えざれば、和泉守も詮

方なく、然らば最後を共にせん、と盃交すその折から、麓の方に武者一騎、母の遺品と紅の小袖は萌ゆる緋縮緬花も恥ろふ艶姿、此方をさして登り来る。菊 お父上く、ヲ、父上

これにおはせしか。和 ヲ、菊四郎存命なりしか、近ふく菊 ハ、ア。和 今汝に申附ける一大事あり、汝は是より長

門へ下り諸卿を始め、慶親公へ此場の様子詳さに言上致し、また傳手を得て、薩州西郷吉之助殿に面會致し、薩長二州は從來のゆきが、りを捨て協力一致以つて國難に處せられるよう御盡力御願申せ、これ父が最後の詞なり、委細はこの書面に認め置いた、この大役は汝の身にとりこの上もなき光榮なるぞ、必ず成就致さねばならぬ。菊 ハ、父上の御言葉に

御ごりますれど、この大役は餘人をお選び下されませ、私は父上と最後を共に致しとう存じます。和 コレ死ぬばかりが忠義ではない、あれを見よ常々父が申聞かせし、楠公御父子訣別の場所は直この下の櫻井の宿じや、吾等は太楠公に比すべくもないが、七生報國は貫かねばならぬ、惚べば太楠公は偉大であつた、汝の會得致さねばならぬのは此一事である、されば汝は直に長門に下り父の志を繼いで、同志と共に再舉を謀れ、之ぞ子として汝のとるべき唯一の道じや、理解つたか、サア速くたて、と言はれて菊四郎、父の教訓は道理なれど流石親子の哀別に心を残し立ちあがれば、和 コリヤその姿にては人目にたつ、衣服を更め間道より氣どられぬよう氣をつけて參れ。父の言葉に菊四郎、あとふりかへりく

木蔭に忍び落にけり。折しも寄せ手はざはめきたち三方より攻め登る、和泉守は莞爾として、和 イデ方々川意よくば最後の戦。と下知すれば勇士は各々部處につき、地物を楯に身をかくし、矢頃はよしと撃ち出せば不意を喰つて寄せ手は驚ろき、列を亂して逃げまどひ、麓の方へ退きけり。和 アナ心地よき今の戦、これにて思ひ置くことなし、方々最後の座に着かん、と靜かに矢立とり出し、「大山の峰の岩間に埋めけり、わが年月の大和魂」と辭世を記して小枝につるし、髪とりあげ一同は容姿改め東に向ひ、和 眞木和泉守平保臣、つゞいて同志十六名只今自決仕る。と都の方を伏し拜み豫て用意の枯枝に一同座して火を放ち、腹一文字に割き切れば、火は焰々と燃えあがる、凄慘極まる烈士の最後、相は灰と消えぬれど忠魂世々に留りて叡慮を安じ奉る礎とこそ、知られる。

胃腸にミラカチ

對話

新川二八朗

A、中老會主催の競演會は確に時宜に適した企であつた爲め盛況裡に終了して大成功を収めた事は先づ目出度い。

B、そうだ、主催者が會を弄さず樂ます己を空うして會務に努力した點は全く見上げた美舉であつたと思ふ。

A、審査に對する君の感想は……

B、名にしをふ叶大夫に鶴澤叶兩師だ、吾々素人は神のお裁きと拜して敢て觸れざるが賢明だよ。

A、でも兩師の藝を批判するのでなく、審査の結果についての感想だから差支へないではないか……上八枚の上位演者中の四五名に審査員の買被りか、それとも此會の推進力が採點の上に影響したのか、自分で豫想外の高點を得て、ほくそ笑んでゐる者があり、又二段目以下にも意外な低點にくさつてゐる者もあると聞いた

が……

B、何事にしても運不運は免れぬもので、競演會だけ例外であるべき筈はない、多少の運不運はあるさ、又競演會終了後多少の波紋はつきものだ、問題にならぬよ。

A、でもある力が動いて多少採點に添削された痕跡があると噂するものがあるが……

B、アマさ、根も葉もない浮説だよ、あれほど主催者が自肅自戒して公明正大を期していたではないか。よし又二三有力者の意志が影響したと假定しても、あれだけ犠牲を拂つて努力してゐるのだから、そうする事が斯道發展の爲めと信じてやる事ならよいではないか、そう神經過敏になるなよ。

A、成程、では審査の結果を統計的に見て百點以下三名、百點級四名、百十點級僅に三名、百二十點級九名の小數に比し、百三十點級と百四十點級の所謂中堅組が五十五名もあるのは何だか太鼓腹の張滿の様な奇形兒的だれ、これに同點があまり多過ぎるのも變ではないか。

B、ホー、そんな數字になるか、然しそれは遇然の結果だよ、兩師共審査屋ではないから、出演者全部を順序よく一二點違ひ

に配列出来る様に器用に聴き分けなかつた所に自然さがあつてよいではないか。

A、では名審査員と云へるかれ。

B、ム、名審査員とも云へぬが、兎に角語り物に對する風とか型とかテツとかいふ點は、流石に素義の大家とは變つた見識の下に立派に鑑査されてあると思ふが、要するに始の一回から名審査は生れないよ二回三回と重れる内に落ちつく處へ落つて立派になるさ。

A、それもそうだれ。アハ、ハ、ハ、アハ、ハ、ハ。

かに・天ぶら

御料理

深川區白河町一ノ六
(區役所通り)

二葉

錦さと



東都五十義會

新橋演舞場に進出

大正十二年七月黒柳柳氏の創立に依て發會を舉行した東都五十義會は、講評員に春音、巴、和十、香伯、光樂、三響、士調、名譽會員に柳鶴、春尾、篁鳳、幹事に一俵、巴仙、がん昇、文久、富士、小石、遠笑、松鶴、柳の諸氏に、和聲、和樂、一樂、桔梗、二樂、司鳳、とを、我笑、里聲、喜童、勳、和洲、和紅、綾生、越斗、喜鶴、二見、貴鳳、若水、都鳥、茶水、蟻昇、勝鳳、琴嶺の諸氏を賛

助員として、當時錚々たる顔觸れを網羅し、黒柳氏幹事長として十數回繼續し、其後星野桔梗氏、杉山巴仙氏、青山峰水氏、三井篁鳳氏、鈴木松寶氏等が會長或は理事長となつて會の發展に盡瘁せられ、竹本朝太夫、豊澤松太郎兩師を技藝監督とし、此間、歴代の審査としては梅本香伯、小西い京、田中士調、鶴澤綱造、鶴澤勝鳳、竹本叶太夫、竹本角太夫、豊竹湊太夫の諸氏であつたが、現在は細川清

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。
 ▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。
 ▽特種の催ほしの外前置きを略します。

— 記者 —

氏が理事長として就任、審査員に安藤光樂、星野桔梗、吉田三芳、長谷川文久の四氏を推戴し、共々會の向上に努力せられ、今日に至つたその傳統は、誠に尊きもので、今回第三十回を迎へ、その記念祝賀を兼ねた春季大會は新橋演舞場に進出し、四月廿六日より三日間華々しく開催される事は祝福に堪へぬ次第である。因に今回より理事長細川清氏は會長に、高瀬操氏が副會長に就任されたが、なほ今回は同會東西大關旗の外に荒木大將、川村元臺灣總督より大臣旗、獎勵章、獎勵盃等の贈り物があつて頗る絢爛たるものである。

大連旭勝會

大連旭勝會並に和光會主催にて、三月十一、十二の兩日社會館に於て故高木花丸氏追善義太夫會を開催。

(初日) 本下(華玉) 沼津(湖聲) 寺子屋(三叶) 合邦(萬華) 先代(表具) 新口村(浪花) 吃又(翠香)

(二日目) 寺子屋(利玉) 辨慶(白翁)

酒屋(柳霞)柳(仙籠)赤垣(白水)白を開催した。

石(二龍)忠四(あさひ)絃(佐太夫、旭勝、勝昇)

なほ旭勝會は三月廿二日午後六時より

淡月樓上に於て左の番組に依り春季大會

壺坂(浪花)忠四(白水)沼津(翠香)

堀川(あさひ)絃(旭勝、ツレ勝昇)

第十一回 帝都素義聯合會

帝都素義聯合會は第十一回春季大會を

三月十八、十九の兩日午前十時半より淺

草並木俱樂部に開催。

(十八日) 鈴ヶ森(都、扇六)鮎屋(と

きわ、蟻三郎)吃又(和舟、絃平)湊町

(朝正、寛三郎)十種香(みなと、良造)

忠六(呂聲、猿平)中將姫(淺路、佳照)

堀川(山門、猿藏)十種香(啓子、雷糸)

組打(龜鶴、重之助)合邦(佐喜子、雷

糸)紙治(古平、猿平)陣屋(旭、道之

助)志度寺(乃菊、佳照)紙治(五口、

道之助)太十(國聲、猿三郎)——夜之

部——鮎屋(千晴、團市)本下(義昇、

扇之助)彌作(いろは、團市)沼津(あ

るを、糸造)山名屋(山生、鹿重)安達

朝顔(禮子)組打(義昇)太十(榮枝)

菅四(三升)合邦(萬華)先代(表具)

壺坂(浪花)忠四(白水)沼津(翠香)

堀川(あさひ)絃(旭勝、ツレ勝昇)

油屋(盛鶴、糸造)忠九(千鶴、猿平)

(十九日) 妙心寺(泉昇、三五郎)太

十(東玉、蟻三郎)鈴ヶ森(錦志、仙十

淨曲無名會は三月十七日午後四時より

電氣俱樂部に開催。鮎屋(どくろ、司好)

新口村(國聲、猿三郎)陣屋(操、道之

助)油屋(長平、龜造)堀川(美峰、猿

之助、ツレ松四郎)の番組にて、例によ

り立錐の餘地なき滿員の盛會であつたが

四月十七日の例會を春季大會として濱町

淨曲無名會 春季大會

郎)太十(喜鶴、鶴玉)紙治(市菊、糸

造)戀十(松雨)寺子屋(やまと、米翁)

佐太村(枝蝶、佳照)野崎(金扇、染登)

玉三(八雲、綾秀)陣屋(巽、絃平)本

下(大嘉津、猿靈)長局(壽瓢、綾秀)

合邦(山生、鹿重)近八(義雀、良造)

太十(喜聲、素女若)忠四(華笑、勝八)

——夜之部——先代(素鳳、廣助)新口

村(可松、糸造)赤垣(美浪、團八)忠

四(春和、糸造)河庄(平茶、廣助)寺

子屋(泉、司好)安達(松實、團八)橋

本(操、道之助)引窓(桔梗、辰六)

日本俱樂部に開催する事に決定し、當日

は午後三時開演、番組は左の通りである。

山名屋(桔梗、辰六)先代(美峰、猿

之助)志度寺(どくろ、司好)太十(國

聲、猿三郎)酒屋(操、道之助)安達(長

平、龜造)大切(掛合)忠臣藏七段目(由

良之助、桔梗)おかる、美峰。平右衛門

三芳、其他)絃(猿藏)

名作淨瑠璃同好會

川口子太郎氏宅に事務所を置き、松林を開催する事になつた。

福笑氏を顧問として一月廿六日文化俱樂部に初ぶ鑿を擧げた名作淨瑠璃同好會は四月廿四日午後五時より丸ノ内電氣俱樂部小講堂に於て、千本樓を立てに第二回

木(淀橋) 鮎屋前(かなめ) 奥(宮古)

道行(愛氷、子太郎) 以上絃(和孝) 大切壺坂(福笑、相駒)

太夫。綱延、勝芳、徳若)

二日目||朝顔日記(叶美太夫、綱延)

―挨拶―陣屋(陸路太夫、徳若) 新口村(南部太夫、勝平) 大切阿古屋(阿古屋、越名太夫。重忠、隅榮太夫。岩永、叶美

太夫。椿澤、南部太夫。勝芳、ツレ徳若 三曲綱延)

三日目―鳴門(越名太夫、勝芳)―挨拶

―眞木薫皇國礎。水田寓居より天王山迄(眞木和泉守、南部太夫。平野國臣、毛利慶親公、隅榮太夫。大鳥居琴治、眞

木菊四郎、越名太夫。家老六戸、松山深藏、叶美太夫。勝平) 酒屋(陸路太夫、

徳若) 十種香(南部太夫、勝平、ツレ綱延)

大阪新義座の東上

竹本南部太夫、鶴澤勝平師を筆頭とし

竹本陸路太夫を始め其他太夫三味線精鋭

揃ひの新義座は、豊竹門造師指導の乙女

文樂を加へ四月一二の兩日釜山を振出し

に京城、撫順、奉天、大連、新京と巡業

し、各地大好評を博しゐるが、歸阪後大

阪の公演を終りいよゝ東上、五月一日

より三日間午後六時より丸ノ内仁壽講堂

に於て開演する事に決定し、今回は本誌

上にも發表せる新作淨瑠璃『維新秘話眞

木薫皇國礎』を上演し、愛義家諸彦の批

判を仰ぐ外、三日間の語り物左の通り。

初日||辨慶(隅榮太夫、勝芳)―挨拶

―堀川(陸路太夫、徳若、綱延) 先代(南

部太夫、勝平) 大切千本櫻道行(靜御前 越名太夫。忠信、叶美太夫。ツレ、隅榮

南北座平塚劇場の盛況

池田三國民主宰の南北座は、平塚國森

鳴門、佐藤生駒氏及び土地の師匠連外有

志の後援に依り三月廿二日午後三時より

平塚劇場に華々しく開演、非常な好評を

博した。

三番叟(南北座社中) 沼津(菊美太夫

延左衛門)―番外―陣屋(生駒、大吉)
堀川(鳴門、兵吉、大吉)―辨慶(都太夫、猿藏)新口村(朝見太夫、芳太郎)
先代(浪花太夫、猿平)

人形―相模、おわさ、政岡(三國)平作、熊谷、與次郎、孫右衛門(國五郎)

およね、藤の局、お俊、しのぶ、梅川、千松(國三郎)重兵衛、傳兵衛、忠兵衛(才三郎)孫八、軍次、老母、侍從太郎(弦之丞)おつる、鶴喜代(新太郎)辨慶、八汐(三左衛門)郷の君、忠三女房(傳藏)花の井、八右衛門、沖の井(冠次郎)

素玄研究會の大阪公演

同會の第七回は三月廿二日午後六時より第一保險の講堂に催はされたが、同會は大坂公演を試み、四月八日午後六時より九時迄大阪貯蓄銀行島之内支店會館にて、左の番組に依り第一回を開催し、終て例の如く座談會が催はされた。主宰岡田蝶花形氏は四月六日下阪。

助)柳(蝶花形、團秀)堀川(團司、小住、ツレ團秀)
なほ東京に於ける第八回開催は、神田キリスト教青年會館にて四月廿一日午後六時より。

辨慶(福登久、猿玉)油屋(若狸、才綱)志度寺(乃菊、佳照)赤垣(彌國太)花菱屋(住昇、團秀)陣屋(喜友、廣夫、若好)

御祝儀(素花、素吉)日吉(素國、素子)野崎(素八、素一)寺子屋(素廣、猿昇)酒屋(重子、勝之助)先代(東朝三平)壺坂(素昇、猿玉)戀十(越道、仙玉)宿屋(旭次、廣春)長局(染登、猿幸)三代記(雛昇、住繁)合邦(佳照清一)湊町(團司、小住)太十(素女)―大切―鳴門(素次、素八)

再び歌舞伎座に

竹本素女會の大會

竹本素女師主宰の素女會は、從來芝の飛行館にて春秋二回、五日間連日滿員の好評を博して來たが、先般歌舞伎座に進出して彼の大殿堂も立錐の餘地なき盛況を極め、同師の奮勵その偉大さを示したが、今回又々歌舞伎座に於て再度の大會を開催する事となり、大阪より團司、小住、雛昇、旭次、住繁、廣春等參加し師の勢力は帝都淨曲界の驚嘆の的となつてゐる。

日時は四月廿七日(水曜)午後四時より、入場料は税共一二階席二圓、三階席八十錢。なほ素女會事務所電話は芝二五七七番である。

御祝儀(素花、素吉)日吉(素國、素子)野崎(素八、素一)寺子屋(素廣、猿昇)酒屋(重子、勝之助)先代(東朝三平)壺坂(素昇、猿玉)戀十(越道、仙玉)宿屋(旭次、廣春)長局(染登、猿幸)三代記(雛昇、住繁)合邦(佳照清一)湊町(團司、小住)太十(素女)―大切―鳴門(素次、素八)

古賀大彌氏入賞披露

豪華 絢爛 淨 瑠 瑠 大 會

九州素義界の重鎮、八幡市の古賀大彌 て華々しく淨瑠瑠大會を催ほされた。

氏は大日本人淨瑠瑠會、養精會、共精會、別府會等に出演の都度優勝或は一等二等の榮譽を占め、氏はこれが披露として、上記四會の外鶴澤友次郎、豊澤廣助氏後援、中島龍鳳、中山清玉、長野六三、矢野津の子、藤本巴、皆上九州翁、廣瀬清笑諸氏の贊助のもとに、三月十六日より六日間毎日午後一時より九州劇場に於

祝賀に参加出演諸氏は全國より素玄名流二百餘名、大彌氏は「寺子屋」夫人は「新口村」令嬢は「先代」を拍手萬雷の中に語り、廿一日を以てこの目出度披露大會は豪華絢爛大盛會裡に終了されたが、個人主催として斯かる連日の大會は斯界空前の記録であらう。

は頗る期待されてゐる。

紅雨莊主人

新道成寺開基を發表

斯道の研究家紅雨莊平井氏は、今回新作淨瑠瑠「道成寺開基」を發表せられた。

本書は氏が、昭和七年の春に南紀に遊ばれ、道成寺へ參詣の折に聞かれた髮長姫の傳説に興味を持たれ、同年秋病餘の小閑にもされたものを今日まで氣永に補筆して完成されたもので、宮門、殺生業九海士の里、道行、道成寺の五段より成り、道成寺の傳説として傳へられる日高川、京鹿子娘道成寺、其他類似のもの多き中に、これは又趣き變つて究められた新作である。

大阪 文樂協會一座を組織

大正三年五月近松座休演以來、人形淨瑠瑠は文樂座が獨占となつてゐた處、先年結成された財團法人大阪文樂協會が半先して文樂座に對立すべき一座を組織する事になつた。これには一昨年文樂座を

松葉家音譜普及會

引退した竹本土佐太夫、竹本叶太夫、竹本角太夫等を筆頭に大阪新進精銳の女義をも加へ、又は素義界中優秀の語り手を交代に出演せしむる企てもある由にて、人形淨瑠瑠保存の聲高き今日、この活躍

同會では過去三年間に於て五十種を發行し、目下新種吹込豫約募集中であるがその種類は左の通りである。吃又、日吉、蝶八、三日太平記、瀧、毛谷村、杏掛、

竹の間、殿中より裏門、妙心寺、松王、文字屋、吉田屋、岩井風呂、堀川、橋本車曳、鈴ヶ森、梅田、逆櫓、四ツ谷、大辨慶(以上全段)

故玉井松樂氏

追善義太夫會

五聲會主催のもとに、昨年十二月廿五日永眠された玉井松樂氏の追善義太夫會が、三月十二日午後四時より木村屋別館ホールに於て開催された。これは單に松竹の伊上聲鳳氏の主宰せらるる五聲會だけの人々に依て催ほされたもので、帝都の淨曲界に盡された事の甚大な功勞者たる氏の華やかなりしありし日を偲ぶには餘りにも淋しみが感じられたが、或は近く五十義會、中老會、無名會又は氏の生前交誼の厚かつた義友諸賢の發起で、盛大な追善義太夫大會が催ほされるのではなからうか。當日の番組は左の通りで、玉井茂枝子さんの夫君が、二世玉井松樂を襲名されたのはうれしいニュースの一つで、なほ故人とは特別親交のあつた栗

手向草鳴門(茂枝、染登)陣屋千里、猿平)鈴ヶ森(旭、染登)岸姫前(三芳猿三郎)沼津(茂里雄、清助)岸姫後(千鶴、猿平)合邦(二世松樂、猿平)酒屋(聲鳳、猿之助、琴松四郎)大切野崎村(お光、三芳。お染、聲鳳。久松、猿平。下女、後家、猿三郎。久作、巖太夫)絃(猿七、市之助)

竹本佳仙看板披露

原千鶴、松岡茂里雄の兩氏が客員として出演された。
竹本佳照師の門下竹本佳仙の看板披露義太夫大會は、仙君事竹本仙照改名披露も兼ねて、日本帝都義太夫因會女子部、女子淨瑠璃研究會、女義東會の後援にて四月十八日午後四時より芝の飛行會館に於て賑々しく開演。
壽式三番叟(若好)翁(佳照)

三番叟(昇登、佳靖)絃(清一、ツレ清二、清三)白石(宮城野(佳靖)信夫(佳世子)絃(仙玉)太十(昇登、巴住)壺坂(越駒、紋教)十種香(佳照、清一)酒屋(若好、清二)岸姫(佳仙、仙照)大切(橋辨慶)立方(牛若丸(市川夏子)辨慶(市川佳照)太夫三味線總出演。

淨曲『壽會』生る

會員は七十歳以上といふ元氣旺盛な淨曲『壽會』が、河野國聲氏の斡旋で目出

度纏つて、四月十四日午後四時から、丸の内電気俱樂部でその第一回が催はされた。番組は左の通りで、産婆役河野氏は淨曲「壽會」に就てとして會員諸氏を一々紹介せられたが、その頒布されたものうち數行をこゝに記して報道し、壽會の誕生を祝すと共に會員諸氏の御健勝を祈る次第である。

番組

野崎村||久作(長平) お光(國聲) 久松、老母(美峰) お染(操) 絃(猿三郎) …… 酒屋(和風「七十一歳」團七) 又助(巴「七十一歳」猿藏) 壺坂(喜聲) 七十四歳「素女若」 本下(壽瓢「七十四歳」綾秀) 寺子屋(素鶴「七十七歳」龜造) 合邦(虎「八十歳」松子)

淨曲「壽會」に就て

河野 國聲

以上の番組で開催する事に決定した壽會では、電気俱樂部の大ホールへ初回から満員の客を呼んで東都の淨曲界にアツト言はして一泡吹かせやうと意氣込んで先づ電気俱樂部を牙城とする淨曲無名會

にも應援を頼んだ處、敬老の意味からも健康と淨曲の實物見本展覽會とも言ふべき意義からもまことに結構な企てと大賛成、それでは無名會の四月十七日の會を日本橋俱樂部へ引越して極力應援致しませうといふ譯で、當日は口の御祝儀に、長平氏の久作、美峰氏の久松と婆、操氏のお染、國聲のお光で野崎村を掛合で演し、無名會の應援團員千數百人にも招待

状を送つて聲援を頼む事になり、これで満員は請合ひと前景氣は頗る盛ん、それに早い來會者には健康長壽の祝意を一杯盛り込んだ赤飯をお土産に出すなど、長老組の張り切り方は大したもの、この分では末廣會(八十歳組)百歳會も保險つきとこのところ若いものは煙にまかれた形、目出度し／＼の次第あら／＼書くの如し。

大阪文樂座人形淨瑠璃(四月)

三月廿日より十日間明治座で連日満員の盛況を呈した文樂人形淨瑠璃は、歸阪早々四月二日初日、四つ橋文樂座に於て

寛治郎) 後(相生太夫、道八、呂太夫、寛治郎) 妹春山||花流し(大隅太太、廣助) 春山(大判事、津太夫、綱造。久我之助、織太夫、團六) 妹山(定高、古鞆太夫、重造、琴團六。雛鳥、伊達太夫、友衛門)

四季壽(文字太夫、和泉太夫)(相生太夫、呂太夫) 辰太夫、竹太夫(常子太夫、宮太夫)(隅若太夫、相瀬太夫) 吉左、喜代之助、八造(團伊三、新太郎) 龍市、

鏡太夫、新左衛門) 酒屋(鏡太夫、新左衛門。駒太夫、清二郎、琴吉藏)

紙屋||前(相生太夫、道八、呂太夫、盲杖櫻||福の神、源太夫。徳の市、

文大夫。玉の市、伊勢大夫(千駒大夫、播路大夫)の太夫、津磨太夫、駒若太夫(富太夫、長尾太夫) 仙糸、吉彌。

綾 秀 會

三月十二、三の兩夜駒形俱樂部に開催
(十二日) 壺坂(清壽) 安達(壽光)
先代(治光) 日吉(花柳) 蝶八(八雲)
長局(壽瓢) 絃(綾秀)
(十三日) 酒屋(彌樂) 辨慶(綾路)
太十(壽光) 揚屋(綾登) 油屋(壽瓢)
絃(綾秀)

京 東 廣 會

昨年京城に移住、ひたすら同地の素義連稽古に精進してゐる竹本東廣師の『東廣會』は、四月十三、十四の兩日美術俱樂部に於て賑々しく開催。二日間の語り物は左の通り。
太十(墨水) 柳(柳清) 忠六(あづま)
本下(かすみ) 中將姫(扇昇) 合邦(三國) 鮎屋(貴勢) 沼津(華名目) 壺坂(楓江) 瀧(東廣)

東 京 淨 璃 瑠 人 形 芝 居 春 季 特 別 公 演

一月廿五日より三日間日本橋俱樂部で滿員の盛況を呈した南北座の『東京淨璃瑠人形芝居』は今回春季特別公演として五月一日より三日間日本橋俱樂部に開催に決定した。番組左の通り。

(初日) 三番叟(南北座社中)本下(松江太夫、延左衛門) 壺坂(駒登太夫、扇之助、美之助) 中將姫(都太夫、芳太郎)
逆櫓(彌國太夫、寛三郎) 神崎揚屋(浪花太夫、猿平、猿若)

(二日目) 三番叟(同上) 朝顔(松江太夫、延左衛門) 鳴門(前、駒登太夫、扇之助。後、朝見太夫、芳太郎) 八陣(彌國太夫、寛三郎) 酒屋(浪花太夫、猿平、松四郎) 玉三(都太夫、猿藏)
(三日目) 三番叟(同上) 白石(松江太夫、延左衛門) 安達(駒登太夫、扇之助) 紙治(都太夫、龜造) 鮎屋(前、浪

花太夫、猿平。後、彌國太夫、寛三郎) 大切(吉野山道行(靜、都太夫。忠信、彌國太夫。ツレ、駒登太夫、松江太夫) 絃(猿藏、芳太郎。ツレ、猿三郎、扇之助、美之助、延左衛門)

親しみ會の復活

中野吳羽、林和勢、石川華笑の三氏に依て組織された親しみ會は、久しく休演中であつた處、今回復活して四月十五日夜芝居二本榎の西町會館に於て新入會の圓六氏が序席を承り、米翁、龜造、勝八の絃で開催された。

京 素 義 聯 盟 大 會

四月十九日より三日間、川崎市福町俱樂部に開催。番組次號。

大阪有名素義大家上京

義太夫會

大阪素義界の重鎮吉田千歳、武田眞若

武居信濃、井上秀玉氏等の上京を機に、横濱の田島集樂氏が序席を語り、淀橋と入谷の兩俱樂部に於て十六、十七の兩夜義太夫會が催された。

本號の増頁——春季特輯——

本號は本誌の目標たる趣味と研究の記事滿載、彙報欄は後から／＼と大會の報に接し、延刊をしても出來得る限りこれが報道に務め、遂に九頁といふ未曾有の賑ひを呈し、思はず春季特輯號となりました。

偶感

山田 壽 飄

三尊惡懶接迎屯 二豎嫌貧近不親
久要无替唯青帝 七十四回還拜辰

春の句

富取 三久女

松ヶ枝を過ぎゆく月や春寒し

薄月の光り届きぬ沈丁花

掛筒の椿揺れたる地震かな

更けてもく夫は歸らず春の夜

雨晴れて海棠にさす薄明り

夕日かけ海棠はまだ濡れてをり

海棠や細雨に暮れて薄明り

藁葺のひさしに煙る目刺かな

春寒き圍爐裏にくすぶ目刺かな

驛近く醉眼に散る櫻かな

近江清華氏

令姉の墓碑建立

近江清華氏は昨年十二月十九日急逝せられた令姉、法名蓮如院妙性日留大姉の墓碑を池上本門寺に建立し、三月十九日壯嚴なる法要を同寺に於て營まれた。

參列者は兜會顧問中澤巴氏、同會長鈴木松寶氏、香伯會の栗原千鶴氏を始め、折しも文樂座東上とて竹本津太夫師も參列、其他淨曲界では淺原朝正、寺岡三幸、山下智恵子、竹本叶太夫、鶴澤寛三郎、竹本文太夫等の諸氏に親戚並に兜町關係者百人近くであつた。

湯原清司氏の令姉

湯原清司氏の令姉田島たけ子様は永々病氣の處、遂に三月十五日午前一時永眠三月十七日午前十時より十一時迄北濱川の湯原氏宅に於て告別式が行はれた。

謹んで追悼の意を表す

太 樟 社

本誌 後援 名譽 會員

(イロハ順)

(東京之部)

廣瀬いろは氏

岡崎 田六氏

吉川 浪補氏

阿部 一氏

北島 北斗氏

中澤 巴氏

安藤どくろ氏

吉田 登盛氏

小川 都山氏

安藤 都昇氏

保々 長平氏

栗原 千鶴氏

神馬 里芳氏

本木 大熊氏

鈴木 和樂氏

小林 和舟氏

本多 可笑氏

飛石かなめ氏

加藤 兜氏

高橋 可遊氏

西田 可松氏

大用 大嘉津氏

田口 辰壽氏

疋田 大龍氏

井上 巽氏

小林 太二八氏

根本 團壽氏

野田 高尾氏

坂倉 素遊氏

浮谷 祖樂氏

川口 子太郎氏

小埜 長とろ氏

宮本 武藏氏

萩原 うつぼ氏

乃村 乃菊氏

中野 吳羽氏

山下 彌生氏

國井 丸都氏

松林 福笑氏

鈴木 兒雀氏

水戸部 壽氏

原田 越巴氏

河野 國聲氏

松岡 語松氏

田中 湖月氏

寶藏 寺天昇氏

大築 葵氏

松本 朝章氏

及川 旭氏

柳 有明氏

中川 愛氷氏

寺岡 三幸氏

木村 さかえ氏

齋藤 山生氏

平井 榮氏

細川 清氏
 金田 金鳳氏
 井田 菊泉氏
 錦 錦 松氏
 淺田 奇聲氏
 歸山 歸世花氏
 川奈部 銀司氏
 猪谷 銀水氏
 岩木 義雀氏
 吉良 蟻若氏
 岩田 末成氏
 高瀬 操氏
 吉田 美地旬氏
 横井 三由氏
 野口 みなと氏

岡田 源氏
 北村 三葵氏
 池田 三國氏
 吉田 三芳氏
 鈴木 松寶氏
 菊池 秋月氏
 平井 壽樂氏
 山田 壽瓢氏
 田口 司重氏
 濱口 秋華氏
 武笠 宏亮氏
 高品 一重氏
 桑原 美峰氏
 佐野 美昇氏
 松岡 茂里雄氏

白井 清華氏
 近江 清華氏
 湯原 清司氏
 沼井 盛鶴氏
 時田 靜史氏
 (地方之部)
 米國平野 一昇氏
 同 武 榮玉氏
 同 杉山 陶岳氏
 同 兼廣 廣玉氏
 同 西本 西紫氏
 榊太宮下 杉鳳氏
 横濱田島 集樂氏
 大垣吉岡十八公氏
 下關保良 鈴鳳氏

横濱 和田 和朝氏

名譽會員

中川 愛氷氏

横濱

和田 和朝氏

本誌後援名譽會員を御快諾
 賜り難有奉深謝候

太 棹 社

近刊

東都素義名流大鑑

(非賣品)

東都素義界に未だ名流大鑑のない事を遺憾とします。弊社は皆様の御近影に平素御愛用の語り物を始め、師匠名並に所屬會名其他の略傳を付して、近日『東都素義名流大鑑』の刊行を企てました。

尤も今までに、小さな寫眞を出して、それに目録のおさすり記事を大盛りに盛り並べて、二十圓、三十圓といふ金を要求したのもある由承りましたが、本大鑑は寫真本位として、一頁金拾貳圓、四六倍判、上質アート装幀の高雅は、皆様の机上に一層の光彩を添へる事と存じます。何卒御申込を賜り、弊社の此の企畫を御援助賜り度御願ひ申上ます。

太
棹
社